

命をオオオオオ燃や
せエエエエエエ！！！！（
ガチ）

ツーカーさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「豊穰」―薬師―に愛されて…仙州に住む人々よりもずっと長生きする祝福呪いに掛かってしまった主人公が開拓の旅に付き添うまでの前日譚。

目次

番外編 蛭尤先生のプレイアブル予想

2

第1話

10

第2話 漫ろ神がそこにおりまして

19

第3話

27

第4話 喧騒の祝福と友愛の結晶、時々

ベロブルグとの交流

40

第5話 熱血（ガチ）

51

第6話 医者と医者

65

第7話 発覚した秘密

80

第8話

99

第9話

112

第10話 酸いも甘いも噛み分けて今

120

第11話 閑話

135

番外編 蛭尤先生のプレイアブル予想

名前 蛭尤

所属 薬師の伴侶

レア度 ☆☆☆☆☆

性別 男／女

運命 壊滅／豊穡

属性 炎／量子

属性運命変化型キャラクター

ストーリー

薬師により不老不死の肉体へと変化した生命。運命を持たずに生まれたが、星神からの介入により強制的に運命を辿る因果に囚われる。5万年程の時を生きており、魔陰の身にも犯されていない稀有な存在。星の暦が制定する以前より存在しており、星神を除いて最も宇宙で長く自己意識を保ち続けている歴史の生き証人。星神の影響により、本来の因果とはまた違った成長を遂げている為、彼女の本来の姿を知る者は彼女を含めて

極めて少ない。

『伴侶』と呼ばれるのが定説だが、人の身で星を斬った『星斬』としての異名も持っている。本人は「不死の身だから成せた事…人ではあらんよ」と否定している。

Lv80 『HP1708 攻撃力821 防御力158 速度110 EP 200/260』

通常攻撃Lv6 生命の種火／六文の手向け EP回復／30 弱点撃破／30
『生命の種火』

HPを3%消費し、指定した敵単体に蚩尤の失ったHP300%の炎属性ダメージを与える。(壊滅)

『六文の手向け』
味方全体に蚩尤の攻撃力20%+425分のHPを回復し、指定した敵単体に蚩尤の攻撃力130%の量子属性ダメージを与える。(豊穰)

戦闘スキル Lv10 生燃無灰／天之伽藍堂 EP回復40／弱点撃破60
『生燃無灰』

HPを最大HP25%+攻撃力15%分消費し、指定した敵単体に失ったHP840%分の炎属性ダメージを与え、隣接する敵に失ったHP600%分のダメージを与える。残りHPが足りない場合は「生燃無灰」を発動した時、蚩尤の残りHPが1になる。

(壊滅)

『天之伽藍堂』

戦闘スキルを発動すると味方全体に蚩尤の攻撃力60%+1450分のHPを回復させ、EPを10回復する。蚩尤は3ターン継続する「虚空の安らぎ」を獲得する。蚩尤に「虚空の安らぎ」がある時、味方全体に与ダメージ+15%、会心率10%、会心ダメージ20%、効果抵抗30%アップさせる。又、蚩尤の攻撃力30%+350分の回復を毎ターンする。(豊穰)

必殺技Lv10 星斬／神の荊 EP消費200 EP回復5／弱点撃破60

『星斬』

蚩尤のHPを最大HP70%+攻撃力30%分消費し、敵全体に失ったHP1500%分の炎属性ダメージを与える。残りHPが足りない場合は、「星斬」を発動させた時、蚩尤の残りHPが1になる。(壊滅)

『神の荊』

必殺技を発動した時、敵全体に蚩尤の攻撃力200%+最大HP50%分の量子属性ダメージを与える。敵の全耐性を40%下げ、強制的に靱性破壊状態にする。敵の失ったHP総量120%分を味方全体に分配する。回復した時、味方全体のデバフを合計6個解除する。(豊穰)

強化必殺技Lv10 陰陽逆魄 EP消費260 EP回復10

^男陽から^女陰の状態に入る。陰の状態になった時、味方全体に味方全体の最大HP50%+10000の回復をさせ、「不死の自嘲」を1個獲得する。「不死の自嘲」は味方が戦闘不能状態になった時、蚩尤の攻撃力50%+745分のHPを回復させ、復活させる効果がある。(壊滅)

^女陰から^男陽の状態に入る。陽の状態になった時、敵全体に蚩尤の攻撃力630%分の炎属性ダメージを与え、「生命賛火」を得る。「生命賛火」は味方全体のHPを蚩尤の最大HP15%分増やし、攻撃力50%アップ、防御力50%アップ、速度を30%上げる。効果は5ターン継続する。(豊穰)

天賦Lv10 薬師の束縛

自身のHPを失った時、又は味方を回復した時、「薬師の愛」を1層得る。SPを消費した場合、もう1層得る。最大6層貯められる。「薬師の愛」は1層ごとに蛭尤の与ダメージを15%、HP上限を3%アップさせる。「薬師の愛」が3層以上の状態ならば、EPを10回復し、SPを1回復する。HP50%以下の状態で「薬師の愛」を保持したままターンが巡ってきた場合、「薬師の愛」を3層消費し、蛭尤のデバフを2個解除し、失ったHPの70%分を回復する。

追加能力

昇格2 獄楽

自身のHPを消費、又は味方のHPを回復した時、20%の確率でSPを1回復する。

昇格4 薬師と共に歩んだ道

戦闘開始時に「薬師の愛」を3層獲得する。

昇格6 億千万者の別れ

蛭尤が戦闘不能状態になった時、薬師が顕現し、最大HP200%の状態まで戦闘に復帰させる。その戦闘にのみ限り永続。戦闘に復帰した場合、会心率20%、会心ダメージ40%アップする。

軌跡で伸びるステータス

- ・ 攻撃力+16%
- ・ HP+24%
- ・ 会心率12.4%

光円錐 『伴侶と言われる所以』（壊滅／豊穣どちらも使用可）

装備したキャラの会心率、HP、攻撃力が24%アップ。HPを消費した時、与ダメージ36%アップ。味方のHPを回復した時、敵の防御力を6%無視するバフを味方全体に与える。回復した味方の数に応じて層数が変化し、最大4層まで溜まる。装備者のターンが回ってくるたびに、装備者のEPが10回復し、味方のEPを5回復させる。

イラスト詳細

男の蚩尤と女の蚩尤が見つめ合い、その間に薬師が笑みを浮かべて存在している。男の蚩尤はどこか悲しげで、女の蚩尤は冷たく何かを見つめている。2人の視線の先には……。

星魂

1凸：薬師に愛されて

蚩尤の効果抵抗50%上昇。効果抵抗の30%分のHPと攻撃力をアップさせる。

2凸：薬師の抱擁

「虚空の安らぎ」発動ターン数+1。また、「虚空の安らぎ」を展開した時、一回のみの無敵バリアを付与する。

3凸：神の接吻

戦闘スキルLv+2、最大Lv15まで。通常攻撃Lv+1、最大Lv10まで。

4凸：耳元で囁かれ

「薬師の愛」を追加で+1獲得できるようになる。薬師の愛を消費するときの層数—2。

5凸：因果も何もなく

必殺技のLv+2、最大Lv15まで。天賦のLv+2、最大Lv15まで。

6凸：神戯

「薬師の愛」を発動した後のHP回復量が100%になる。「薬師の愛」の上限が8層になり、追加で一層ごとに与ダメージ+5%、HP+2%、会心率+5%、会心ダメージ+10%の上昇効果を得る。

凸イラストは特例で2人の蚩尤が描かれている。しかし、完凸には薬師とも取れる姿が隠れており……

運命は開拓者の様にメニューからでも変更可能。

第1話

燃え盛る業火とは生温い。

相對するのが絶対零度の使徒なれば、こちらは神滅の怪炎。

全てを凍え止める理の氷と総てを焼き動かす絶対の炎は見つめ合い、嗤ってやった。

その炎は止むことを知らぬ、その炎は酸素を供給してはおらぬ、焚べるは生命。燃やすは信念。

「神の権能に酔いしれたか。痴れ者が」

最早、目の前の女がかつて知るべき女なのかどうかも怪しい。

世界の理を動かす虚数エネルギーを操る歌者に本来の意思はあるのか…いや、未だ新生世界で新たな人類の再興を望む愚かで憐れな建創者か…。

謔言のように「新たな世界…」「星核が全てを…」と呟いている。

「……嘗てのお前は好きだったんだがなあ」

霜が急速に熱され蒸気が凄まじい。周りにいる者たちは過度の温度変化で生体機能にバグが生じてきていた。

「幕切れだ…」

狂熱が常冬峰全体の雪原を晴らす。

それはヤリー口に誕生した新たな人類の灯火であつた。

運命にそぐわない魂を見た事があるだろうか。

人は誰しも運命の奴隷だ。最もたる例が自分自身であることを観測者は自負している。
る。

だが、見よ。今しがた生まれた魂は、かの星神アイオーンでさえ運命の軌道に乗っているというのに、どの軌道にも属していないではないか。

今、彼を見つめているものは星神だ。自身らには在るものを宿していない彼に、己の運命を受け継ぐことなく生まれた彼に：寵愛を受け継ごうと運命を宿しようと、愚かな見詰め合いをしている。

刹那の時五年の月日、均衡を破り、最初に触れ、その魂に祝福呪いを受けたのは星神きつての慈悲深さを持つ「豊穰」の星神—薬師—であった。嗚呼：悲しい事が起きたものだ。運命を受けた途端に星神達は彼に興味を無くし、去って行ってしまった。

ただ、最初に彼を愛した「豊穰」—薬師—を除いて…。

彼には運命が宿された。：星神の中でも苦難と苦痛伴う最も残酷な運命を：彼は宿してしまった。

5年という短い時間で自分に何が出来ただろうか。

神神の睨み合いに付け入る隙などあつただろうか。

彼は運命にそぐわない強さを持っていたものの、星神を打倒出来るほどの超自我を持っていなかった。

：ああ残念だ。

自分からも彼への興味が失せてしまった。

豊穰に愛された者達の末路はよく知っている：せめて、彼がそうでないと祈るばかりだ。

——とある観測者が発狂する前の手記

湯水に浸かった身体が痙攣を起こし飛び起きる。

気づくと翡翠色の葉に身を包まれ、無数の目に凝視されていることに気がついた。目に写り込んできた人物は：いや人物？

人とは形容しがたいが、人を模した生命そのものであったと断言できる。

私が目覚めたのを確認するやいなや、六つの腕が私を包み込み抱き寄せられる。

途端、湧き上がる感情は未知への畏怖、遥か高位な存在への敬愛、そして根源的な欲の性欲：いやこれは繁殖欲？…ともかく、その形容しがたい恐怖物は美しかった。

慈愛を宿した瞳が億千万と自分を撫で付け、魂を潤す波動が鼓膜によく響いた。

「嗚呼、運命を知らぬ子よ。吾は汝が愛おしい」

其の声には明らかな愉楽の色が聞き取れた。

「唯、運命を存ぜぬ身のみで汝は涯有る身。吾は其れが酷く悲痛だ…。吾は汝を愛そ

う。永遠に深く…唯、唯一に。汝だけを愛そう。其の身から重荷を捨て、解脱し吾の愛し人になっておくれ」

まだ生まれて5年…遙か高位なる存在は私に求愛？いや、これは求愛というものでもない。独占といつても良いだろう。

独占される気分がこんなにも最悪だとは生まれて初めて知った。

六つの腕が顔に寄せられ、口付けをされるが…離されない。

遙か高位の存在はそのまま舌？（恐らく舌と思われる器官）を捻じ込み私の口内を犯してきたのだ。

快樂とは言えぬ快樂が身体を襲い、何度も絶頂してしまった。

生まれて早5年の私には、その刺激は強烈過ぎたのだ。劇毒と言ってもいい。

何度壊れそうになったか分からない。歯をくいしばる事が出来ない以上身体中にあらゆる万力を込めて、意識を保たせる。

果たしてその時間が幾らばかりか測りかねるが、正しく刹那的永遠と言って正しい。名残惜しそうに口元が離れ、高位の存在、「豊穣」の薬師は話し始めた。

「嗚呼…残念だ。吾が愛した故に愛す理由が亡くなってしまった…。だが、一度愛した汝を吾は捨てはせぬ。有言通り、永遠に汝を愛そうではないか。吾が伴侶よ。共に

「豊穰」の運命を歩もう」

彼女に口付けをされ、何かを混入させられた事は分かっていたが、快樂を超越した感覺に身体が追いつかず、ただえずく。

何かを混入させられた時、確かに見えた景色には、万物が際限なく成長し、やがて残ったのは忌み物が悲しく叫んでいる姿……だったように思う。それも一瞬でよく分からなかったが。

薬師はそれ以上は何も言わず、私を抱き締め続けた。次第に私と同等の大きさになったのに気づいたのは抱きついたらまま30日ばかり経った頃だった。

私は何も食さずとも、眠らずとも生きれるようになっていた。もはや人ではなかった。

薬師とは5万年ばかりの時を過ごし、別れた。

これでも随分一緒にいたと思つたが：奴からすれば年齢の1000分の一にも満たないようだ。どれ程奴は生きているというのか……。因みに奴は年齢を聞かれて怒るよ

うなタイプでなかった為、聞いてみれば生物の概念が生まれた瞬間…と答えられた。億は越えてるだろうが正確な値までは判断しかねるとのことだ。本人でさえわからない…と聞いた時は神の不完律性を確信した。

因みに最も古き星神は琥珀の王『存護』クリフォトであるらしい。恒星の爆発に飲まれた瞬間を見た時は流星に死んだと思っただが、奴はケロリとしていた。おそらく、星という概念が世界に生まれた時同時に顕現したのだろう。それ程の格の違いを感じた。

最後まで薬師は別れるのを愚図っていたが…いい加減独り立ちをしたかったのもあり、無理を言って別れた。

奴との旅は楽しかったが…何より制限が厳しかった。何をするにしても奴の許可がいるし、他の女と喋るなど言われたり、目も合わせるな、視線も向けるなど言われ、大分苦労したのだ。

奴の嫉妬は分かり易かった。とにかく女絡みでなければ機嫌は直すし、案外チョロいので融通が利くが、一度私の黒が分かるとそれはもう大変に…大変に面倒くさい事が起きるので反省している。

アイツの閨で監禁されるのはもう嫌だし、犯されるのも疲れるから嫌だ。こちらの欲は枯れ果てたというのに、流星は星神とでもいうべきか、それとも繁殖を司る星神を吞

んだからか：性行為する器官も無理やり作ってまで交尾したい気持ちは何なのだ。

これからは自由に豊穡の運命を辿る旅ができる：そう思うとなんだか涙が出てきた。いつそのこと、運命の乗り換え浮気をしたら：後が怖いがやってみるのも良いかもしれない。

以前にも訪れたことのある世界に訪れた。

以前：と簡単に言っても1500年前程前の話だ。

少し寄り道しただけの星だったが生命の逞しさが顕著だったのを覚えている。「存護」のクリフトが管轄していたらしく、薬師も特に何をすることもなかった。当然、やることなすこと全て薬師にやられていたので俺のやることもない。そもそも俺の仕事は精々が、薬師の側で一緒にいることぐらいだった。

薬師の与える影響は基本的には不朽、不老という面が目立つ。盛者必衰の理を許容出来ない運命に在るので仕方のないことだが。それを俺に押し付けられないでもらいたい。これを五万年前のファーストキスの時に言えばどれ程良かったか：まだ星神に勝る程の自我が無かったのが本当に残念だ：。

ともかくまあ、このヤリーロVIは薬師の魔の手から何故だか逸れたのだが——恐らく豊穡とは違う強い運命が結びつけていたんだろう——別の危機に瀕していたようだ。

緑豊かで温暖な気候でまかり通っていた筈だが、はて？

いつから霰と極寒が襲う死星に成り果てたのだろうか。豊穡の加護とある技のお陰ですっかり寒さをもとしない体だが、裂界の生物までもが凍り付いている歪な現状に異常性ははつきりと分かる。

この星で何があつたのか。探る必要があるだろう。まあ、十中八九このような惑星規模での災害と言えば万界の癌だろうが。

第2話 漫ろ神がそこにおりまして

シルバーメインという連中に連行されてしまった。

昔の警備団体だったものが正式に名前を改め活動しているといった具合か？

シルバーはこの銀雪を表し、メインは…なんだろうか。上手い具合に内訳が出て来ないな…。

シルバーの言葉に守護という部分があったのだろうか。琥珀王の管轄だから護という意味があってもおかしくはないが…単純に銀の盾という事か？

五歳の子供が魔王を金矛と銀盾を持って倒すという伝説があるくらいだしな。うん、そういうことにおこう。

「何故こんな吹雪の中、そんな軽装でうろついていたんだ？自殺願望者というわけでもないだろう？」

不意に、隊長さんからそんな質問をされた。うーむ。なんと返答しようか。

「星海から降りてきた世界渡航者…といえば良いか。まあ、君達にとって『よそ者』である事には変わらない。空からやってきた旅行者とでも思ってくれ」

「そんな話誰が……!」

話を信じるにも無理があると、シルバーメインの隊員が反論しようとするも、隊長が待ったをかけた。

「待て。彼の服装は明らかにベロブルグのものじゃない。早くに話を決めるべきではないだろう。それに、遙か昔は天外より来訪する者たちがいた……とも聞く。……まあ、約680年前、この寒波が発生して以来この極寒を越えてベロブルグを訪れる者はいなかったがな。……悪いが、もしその話が本当だとしても俺の判断では何も言えない」

「まあ、早々に信じることも無理だろう。前例はあるが、それも大昔ともあらば」

「すまない……だが、お前のいう事が本当ならば、どうするか決定されるのは大守護者様だろう」

「そうか。……その大守護者様には現在、謁見可能なのか?」

「……大守護者様は常にお忙しい身だ。だが、天外より久方振りに現れた来訪者となれば対応も違ってくるだろう」

「……ふむ、分かった。では、身の潔白を示す為にも案内を頼む」

「ああ、道中の護衛は任せてくれ。現時点をもって、大守護者様に君を送り届けるのが我々の使命になった。先に使いを送って大守護者様には伝えておこう」

柔軟な頭を持っている隊長殿には感謝だな。

元来、ベロブルグ郊外での活動は法律によって厳しく統制されているらしい。見つけた瞬間即逮捕の軟禁生活もあり得ただろう。

因みに、この厳つい鎧に身を纏っているのはオレグという人物らしい。シルバーメイの隊長格で腕前もそれなりにあるようだ。

鎧に隠れて見えないが、歩く姿は修羅場をいくつか抜けてきた者のソレだ。

道中、実際に裂界生物に襲われた時には見事な体裁きで撃退していた。

一度、裂界生物に襲われるハプニングがあつたものの、無事にベロブルグにたどり着く事ができた。

先ほどの銀世界とは違い、青空が見え渡り、気候も温暖。人々も活気に満ちており、良い都だと直感的に感じた。

「ようこそベロブルグへ。ここが人類最後の砦だ」

「何？ほかに、この都のような街はないのか？」

「ああ、過去の天災で生き残った人類はここに住む者たちの先祖のみ、後は永久凍土の続く土地だけだ」

「そうか…難儀な星だな」

「痛み入る…」

歩きながら情報収集も兼ねてオレグに話しかけると、オレグは軍事上の秘密以外は全て答えてくれた。

例えば、この街の温暖な空気が保たれているのは、地中と地表に埋められている加熱機によって温室効果が保たれているのだという。少し口調が変だったので何処からの本からの引用だったに違いない。覚えていられるのもスゴイと思うが…。

因みに、昔は下層部中心にある炉心を使用していたようだが、今は使用されておらず、記念として残されている様だ。

今後、下層部に来る事があれば是非見に来てくれとオレグは笑って言っていた。

道中、マンホールの下から聞こえてくる声、街の中心部にある青結晶の巨大なモニユメント、鮮やかな噴水に少しばかり目を奪われていきながら、荘厳な城の目の前にいることに気づいた。

「着いたな。ここがクリフト城。ベロブルグの心臓であり、建創者の本部だ」

「星神の名を冠するとは大きく出たな」

「過去の建創者の方々は蔑ろにされながらこの都市を築いた。…彼の方の声に導かれてな。そして、人類を天災と寒波から救ったんだ。尊崇の念を示す為、我々はこの城に

星神の名を名付けた」

「重厚な歴史が多分に含まれているようだ」

もつとも、680年の歴史というのは俺にとつて、ちよつとした昔に過ぎない。歴史と呼べるか怪しいが……。彼らの前では言わない方が良いだろう。

長い階段を上り、門を潜る。

いくつかの部屋のドアを横見しながらこれまた長い廊下を通過して、一風変わった扉が見えた。

「グレーシャ様、失礼します」

オレグと共に、その部屋へ入る。

視界が広く取られ、左右には溜まりに溜まった書類の山といくつかの本棚が見えた。

「来たか。オレグ、そして天外の客人よ。御苦労であった。使者から話は聞いている。オレグ、貴様は下がってよいぞ」

「はっ」

俺を横切る時にオレグが視線で粗相のないようにな、つと言っているのがよく分かる。

心外とは思いつつも、グレーシャと呼ばれた少し年老いた女性に耳を傾ける。

扉の閉まる音が聞こえてから、大守護者は話し始めた。

「ようこそベロブルグへ。天外より訪れし来客よ。私はグレーシャ・ランド。ここに来る最中、聞いていたかもしれないが、ベロブルグの守護者たる者だ。この場で其方の来意を尋ねようか」

「お初お目にかかる。大守護者様。私の名は蚩尤^{シユウ}。旅をしている長命種です。今回は少しこの星の変わり様を見ましてね。少々気になり、天外より降りてきました。まあ、大体のことは道中でオレグさんが教えてくれましたが」

「そう畏まらなくても良い。蚩尤殿」

「そうか？ならば普段通りで口調で話すぞ」

「構わない。…オレグから聞いたということは、この世界が抱えている難問をご存知のだろうか？」

「天災が降り、寒波が吹雪きこのような都市で人類を存護しているということは聞いた。そして裂界生物と戦って人類を死守しているということも。まあ、それ以上の関わりは知らん。…そして来意だが、古い先長い人生、少しこの様な星で100年程、滞在しようと思つてな」

「100年とはこれまた随分と長いな」

「長命種にとつて100年なんぞ、短命種にとつての10日に過ぎんよ。まあ、ちよつとした旅行だ。100年程楽しんだらすぐ出て行くつもりだ」

「……………ふむ。では、金銭面での援助と、一時的な住居の手配をしよう」

「ご厚意感謝するが、住む場所は自分で用意しよう。自分で自分のことをせねば旅は続けられないのですね。そして、金銭的な援助もいらさない。欲しいのは働き口だ。長いこと生きているので無駄な知識と腕っ節には自信がある。どこか良い就職先はないか？」

「……………分かった。それでは蚩尤殿にはこれからベロブルグ学院で臨時講師として働いていただきたい。…まあ、講師と言つても、何かを教えるのではなく、外の世界の話をして、生徒たちに夢を持たせて欲しいのだ」

「講師か。成る程、久しいな…。私としてはシルバーメインで働こうかと思つていたが…」

「流石に、我々の抱え込んでいる問題を客人に取り扱わせる訳にはいかないからな。それに、外の話となれば多少の金を払つても事ベロブルグに於いては誰もが聞きたがるものだ。無論、私含めてな」

「そうか…そう言われるとむず痒くなるな…。…折角の紹介先だ。存分に働かせて貰う」

大守護者との会話はここで終わり、グレーシャとして話しかけられた。

3ヶ月に一度は暇な時間を設けるので、良ければクリフト城に赴き、他の世界の話をしてくれ。との事だった。勿論、断る理由もないので了承した。礼を返さねば無作法というものだろう。

その後はベロブルグ学院なる場所で働くために必要な手続きをしてもらい、一週間後に正式に赴任する運びとなった。

第3話

「新しくこのベロブルグ学院に赴任される事になりました。蚩尤先生です。皆さん拍手でお出迎え下さい」

拍手とともに舞台袖から身体を見せると、少しばかり黄色い声が響く。

その声を聞いた後は必ず恐い笑顔の薬師がいるので若干トラウマだ。思わず後ろを振りかぶってしまうがそんな恐ろしい神はいない。

監禁される恐怖から安堵しつつ、中央のマイクスタンドへと近づいて、未だ何を言えばいいかと悩ませている頭に鞭を打った。

「紹介に上がった蚩尤です。これより臨時講師として働かせて貰います。講師をやるのは久しい上、何かと不自由もあると思いますが、よろしく願います」
初会の意を込めて頭を下げると、もう一度大きな拍手が響いた。

ベロブルグ学院という場所は、ベロブルグにとつての小中高大の一貫校であり唯一校だ。人類が相続するにはいささか狭いと言わざる終えない範囲の領土面積で生み出した最大規模の学び舎。

総勢生徒数2500名を誇っており、毎年数多くの生徒が卒業して入学している。校舎はクリフト城近辺に存在し、生徒の安全はシルバーメインによつて守られている為警備面でも定評のある場所だ。指定緊急避難場所にも登録されており、万が一の場合はシエルター代わりにもなる：とはパンフレットに書いてあつた事だ。

高学部に入ると己の進路の為、細かく学ぶ分野が別れる。科としては、機械工学にまつわる機工科、芸能や音楽を担当する芸能科、政治に関連する法律学科、医者になる為の医学科、歴史にまつわる史学科、小説家を志す者達が在籍する文学科。と、他にも様々な学科が混在しており、大学部まで続く。

因みに、俺の担当としては臨時講師という特殊な立場なので全学科が生徒対象となる。

ただ外の世界の話をするというだけなので当然と言えば当然だ。

まあ、五万年も過ごしてきた分無駄な記憶は数多くある。話のネタに困ることはないだろう。

なにより薬師によつて記憶は永遠に続く脳に弄られてしまっている。片時も薬師の

事を忘れてはならないように。傍迷惑な事だがこういう時に役に立つので、本当に切つても切れない関係になったものだ。

かと言つて、合計監禁期間5000年分の話はしなくていいだろう。誰が聞きたいのかも分からん。

「蚩尤先生つて、大守護者様からの話では空から来たつて…聞いたんですけど、本当ですか？」

若い女教師がそんな質問をしてきた。

「本当の事でなければ、俺はここで臨時講師をやっていない」

「アハハ…：：：そうですよね」

「何か証拠でも出した方が早いだろう…：：：そうだな。コレはどうだろうか」

「蚩尤先生、コレは？」

「仙舟『曜青』という場所から拝借してきた簪だ。この様に髪を纏めて…：：：飾る」

「お…！確かにコレはペロブルグには無いものですね…：：：初めて見ました！というか、結構似合ってますね！」

彼女の声につられてか、物珍しいものを見る様に私と簪を見る先生方が増えた。

「まあ、これ程美しい品だ。どの様な者にでも似合うだろう」

「えへへ、そんなあく私にも似合うだなんて♪」

「誰もそんなことは言つとらん」

「あつ…はい」

シヨボンとした彼女に、感情の起伏が面白い奴だと評価をつける。

しかし、こうも暗くされると少し罪悪感に苛まれる。

「まあ、これも何かの縁だ。この簪を貴方に譲ろう」

「え!?! いやいや! いいですよそんな高そうなもの!」

「別に高くはない。朱明にとっては日用品であり、女性ならば付ける者も多い。貴方の様に美しい女性とかな」

「……えあつ!?!」

急にボンッと爆発したので、更に面白い奴だと評価をつける。中々出来ない芸当だ。こちらが攻めた時に稀に見せる薬師の反応とも似ている。

「いやあ…その、急に褒められちゃうと…私ってコロツといっちゃいますというか…それに今日会ったばかりですし…そんな早く男女の仲になるだなんて…あ、でもお食事とかどうかなあなんて、実は一目見た時から思っていたりしてえ……」

「蛭尤先生！お時間です！」

「了解した。さて…あの坊ほんの話からでもしてみるか。ではな、リーチエ先生」

「あ……………え？名前知ってくれてたんですか!？」

「首からぶら下げてる名札があるだろう」

「あつ…ハイ、ソウデスヨネアハハ…ワタシナニツテルンダロ…どうぞ行つてらつ

しやいませ〜蛭尤先生……」

「何言ってるんですか？リーチエ先生。貴方が蛭尤先生と一緒にやるんですよ」

「おや、そうだったのか」

「えっ!? あゝっ!? 本当だ!」

「それではよろしく頼む。リーチエ先生」

「あつ、はい!よろしくお願ひします!」

本当に、面白い先生だ。

でも、どうしてか背後に見えぬ神の気配を感じる。それが最も恐ろしい。

仕事モードと言えばいいか、リーチエ先生は教室の扉を開けるなり凜とした態度で生徒達と向き合っていた。

先程の会話ではお茶目な一面が多かった様に思うが、人は一側面ではないという事一度々痛感させられる。

因みに大学の担任らしく、相手をする生徒たちは皆、廊下ですれ違う生徒たちよりは一皮大人びていた。

「朝の集会でも紹介した蚩尤先生です。今回の授業で講師をしていただきます。ベロブルグの空から来たという事で、ベロブルグより外のお話をしてくれます」

ざわざわと囁し立て、生徒たちが疑心の満ちた目でこちらを見てくる。

突然言われた事で納得も理解も出来ていないのだろう。

「ちよつと、皆さん！」

「リーチエ先生、この寒波の中生きる人間の方が珍しい。それに、ベロブルグの民と違う部分と言えば精々がこの服装くらいで信じる者も居ないだろう。怪しい講師が来たという認識じゃなからうか」

「ですが…」

「まあ、論より証拠。先程渡した簪よりも証拠らしい証拠を見せるとしよう。先に言っておくが驚かないでくれよ？」

豊穰の運命に触れる。少しばかり放っておいてしまったが、拗ねては居ないようだ。ほんのちよつとのみ己の運命と向き合えば運命に属する命の力が身体に宿る。

身体の様相も薬師と大分近くなっただろうか。流星に無数の瞳は出さないが、神秘的な角が生えれば、皆一様にこちらに向いた。

「これがベロブルグより外から来たという証拠になっただろうか生徒の諸君」

「うわあ」

「何あれ!？」

「角が生えてる…それも結構大きい」

「蚩尤先生!?!これは一体何なんですか!?!」

「言ってしまうばこれが俺の真の姿だ。普段は人の世に溶け込めるよう皆と同じような姿だが、本来はこの様に角が生えている。それが俺の種族なのだ。そして、俺のような種族は皆長生きでな。特に俺はとびきり長く生きてきた。そんな俺が空の星々を転々と巡った話…聞きたくなくなっただろう?」

「うん。これはちよつと聞いてみたいかも…」

「どんな話か気になるよね」

「ね!」

「あ…あのイケメンフェイスに鹿角とか私今日死ぬんじゃないかしら…ドタイプな

んですけど」

「私より年下だと思つてたのに……でもそれはそれでギャップがつ！」

「あの先生の角触つてみたくない？」

「そうね。ちよつと手触りが気になるし、講談が終わつた後に聞いてみましょう」

「俺、ぜつてえーあの先生と仲良くできる気がしない。初恋キラー過ぎんだろ……」

「まあ、一応誠意を見せて正体明かしてくれたんだし、いい人だと思うよ？」

「あの先生……いい筋肉してるな」

「血が……いえ、筋肉が騒ぎますね部長」

「ああ、分かる。分かるぞ。俺には分かる。あの先生は相当な筋肉が仕上がっている

とー」

リーチェ先生がどうやってこの子達を纏めて来たのか気になるな。

まあ兎も角、語り継ぐとしようか、あの坊のことも、この世界とは全く逆の世界の話
を。

「——その時の坊がな、ついうっかり師匠が大事にしていた餅を食べてしまい…誤魔化すのだからその誤魔化し方が後に將軍と呼ばれる程の知略を活かしたのか巧妙でな……つと」

キーンコーンカーンコーン

授業の終わりを知らせるベルが鳴る。

「終わってしまったか。昔話をする時があつという間に終わってしまうな」

えく！と生徒たちから気分を落としたような声がチラホラと聞こえる。

そんなに面白かったのか。と少し嬉しくなる半分、確かに講談中に眠っているものも少なかったのを思い出す。

一番反応が良かったのは坊と新しい星へ降り立つ時だったか。やはりベロブルグの民は外の世界を楽しみにしているらしい。灼熱の世界とは想像もつかないのだろ。

「うっそ…いつもと本当に同じ時間？先生達がベルの時間ズラしたんじゃないの？」

「それはないわよ。ちゃんと時計を見れば90分経っていることが分かるわ…本当に短く感じちゃったけどね」

「俺たちはなんて狭い世界に居たんだこんちくしょう！」

「最初はまだ作り話かと思つてたけど……流石にそんなのじゃ説明つかないくらい内容が濃かった……長生きつてするもんなんだね」

触りは上々、特に面白くしてやろうと誇張気味に言つたわけでもないのに、それでも生徒たちは楽しんでくれた様だ。人を楽しませるにはリアリティが大事とはどこの小説家の言葉だったか。

「授業は終わつてしまつたので、話の続きは答えてやれないが……何か質問には応えよう。何かあるか？」

「はい！」

「それじゃあ、その君」

「蚩尤先生つて、彼女とかいるんですか？」

実に、女学生らしい質問だった。

やはり、こういう年頃は色恋沙汰に興味を示すものなんだろうか。薬師はとづくに学生という歳ではないからな……少し分らないが。

しかしまあ、彼女か……アイツはもう彼女というよりは伴侶だからなあ。

「彼女は居ない。だが、妻なら居る」

「ウツソマジ!?!」

「どんな人どんな人!?!それって今も生きてる人!?!」

心なしか、隣にいるリーチエ先生の空気が落ち込んだんだが…周りの男女達もそれを察した様で、哀れ目でリーチエ先生を見ている。

「今も勿論生きています。それに俺よりも数百倍長生きしている」

「五年以上の年の差婚って何!?! どうやったなら出会えるの!?! 宇宙凄すぎ!」

「因みに俺の妻は俺よりも強い…」

「あ、解釈一致。なんか蚩尤先生って結婚してたら奥さんの尻に敷かれてそうだと
思った」

俺ってそんな風に見えるのか?

だが、そもそも存在としての次元が違いすぎて尻に敷かれるどころの話じゃない気がする。

「それじゃあ、次はアタシ!」

「じゃあ、金髪の君」

「先生ってロツクに興味ある?」

「ロツク?」

「そう! 最ツ高で最強の音楽!」

「少し知っている程度で興味があるとは…」

「ホント!?! それじゃあ、先生は人生の半分は損してるよ!」

えっ。二万五千年も？

「良かったら聴きにきてよアタシらのバンド『機械ブーム』をさー!」

「分かった。時間が合えば是非聴きに行こう」

「やったね!カカリア!顧客が増えたよ!」

「上手いこと先生を丸め込んだわねセーバル!」

音楽の趣味はそれ程無かったが、これもまた何かの縁だし触れるのも良いだろう。何より彼女の音楽の情熱は是非見てみたい気持ちがある。

「蚩尤先生…そろそろ次の授業にも…」

「そうだな。すまないリーチエ先生。それではな、皆また逢おう」

「絶対聴きにきてねー!!」

セーバルと呼ばれていた女学生に手を振りながら別れを告げると、そのままリーチエ先生に伝えられた階層に移動し、そこでも同じ様な話をした。

印象として残ったのは、私にロックを教えるといったセーバルと、セーバルと仲の良さそうだったカカリア、高学部で出会った成衛官候補生のジェパードと子供ながら医療に深い造詣を持ったナターシャだった。

他にも濃い面々は粒揃えに居たが…特に気になったのは何故かこの4人だった。強い運命の祝福が彼らにはあるのかもしれない。果たして…。

第4話 喧騒の祝福と友愛の結晶、時々ペロブルグとの交流

あいも変わらず都市ペロブルグの上空のみが鮮やかな青を映し出している…そんな昼下がり。

「あははは!!先生ってばアタシを芸能科の生徒だと思つてたの?」
ペロブルグ学院屋上で快活な笑い声が響く。

その声の主は、昨日の講談後にて蚩尤が気に掛けていたセーバルである。

「ああ…でもまさか機工科とは思ひもしなかつた…」

「ふふふ、これでもセーバルはランドウー家の才女って呼ばれてたのよ先生。だから、難しい事でも簡単にこなしちゃうの」

「成る程…あくまでロツクは趣味というわけか…」

「ん〜。それもちよつと違うかも」

「何?」

「アタシはね、この寒波と裂界についてずっと疑問に思つてたんだ。もしかしたら原

因は『星核』にあるんじゃないかってね。ロツクはもちろん大事。でも、小さい頃から謎に思ってたこの答えが：アタシの中で夢になった。ロツクよりも大きなね。だから、私は機工科にいる。ペロブルグの軍事には機工も重要な役割を果たしているからね。ペロブルグの軍に入るのにこんな簡単な事はないし。もし、軍に所属したら真つ先に研究部に入って『星核』について研究するんだ。ていうか、そこでしか星核の研究が許されていいの。何でかは知らないけど。けどまあ、もし研究が終わったらアタシは生涯、ロツクに命を捧げる予定だよ！趣味で終わらせたくなんてないしね！」

「そうか：：：。壮大な夢を持つことは人の生きる活力になる。セーバルの夢、そしてロツクに俺は敬意を持って応援するでしょう」

「そんな畏まらずに応援しなくてもいいのに」

「長く生きる者ゆえの羨望だ。素直に受け取っておけ。若者」

「そう？それじゃあ、折角の先生からの応援を貰ったことだし、此処は盛大に祝歌をあげようじゃないか！」

「あらあら、こうなったらセーバルは誰にも止められないわよ？ 蚩尤先生」

「いいじゃないか。一度、彼女の歌を聴いてみたかったんだ私は」

「彼女の歌声は誰にも負けないって私が保証してあげるわ」

「随分、彼女の事を好いてるな力カリア」

「もちろんよ。セーバルと私は親友だもの」

ふふん、と自慢気にそう語るカカリアからは絶対の自信が見て取れた。

普段話してる中でもセーバルの声質は良いと感じるし、親友であるカカリアからの太鼓判も合わさって期待に胸を膨らませる。

次の瞬間、紡がれた少女の情熱歌声を聞き届けた。

ここに一人、セーバルのファンが誕生した。

◇

また、少し違う昼下がり、用意していた弁当も食べ終えそろそろ生徒達も自由に時間を扱い始める頃。

「ジェパードはセーバルの弟であったか」

「どう？ ジェーちゃんとアタシって結構似てると思わない？」

ズイツと、セーバルは自分の顔にジェパードの顔を抱き寄せる。

わしやわしやと頭を撫でて随分と可愛がつている事がよく分かる。

「顔を近づけるのをやめてくれ姉さん…恥ずかしい」

「お互い綺麗な金色の髪をしているな…瞳の色もよく似ている」

「でしょ！」

「蚩尤先生…僕は貴方の話を聞ききたのであつて、姉さんとこんな戯れをしに来たわけでは…」

「まあ、そう姉を邪険にしてやるな。それに俺の話などいつでも聞けるだろう。今は姉との時間を大切にしておけ。学校が終わった後はこの屋上にいるか、街を適当にブラブラしているぞ」

「しかし、先生が仰っている將軍様の話はこのベロブルグの防衛戦において何か活用があるのではないかと…早期に知りたいのです」

「中学部でそんな事を気にしてどうする。まあ、そのベロブルグを守護するといふ、クリフォトにも大守護者様にも喜ばれるだろう精神には感服するが…もう少し姉の珍妙な発明品の様に趣味を作った方が良いと思うぞ」

姉とは対照的に頭が固いのは…戍衛官候補生という立場の重みを感じているためか。

ランドウー家というのは、王の盾と呼ばれるだけあり、随分と優秀な人材が多い。

「そうだよ、ジェーちゃん。幾ら何でも模範生過ぎるって」

「……分かりました」

「お、今日はいつもより納得してくれるの早いね？」

「…諦めたんだ。こういう時の姉さんには勝てない…ってね」

「そんな悲しい事言わないでよ。ジェーちゃん」

だれにでもわかる嘘泣きで、じゃれついている。

セーバルは余程弟の事を溺愛しているらしい。今回の短い間の会話だけがそう感じ取れた。

姉の抱擁を若干、鬱陶しそうにしているジェパードにこれからの約束を告げた。

「まあ、あの將軍の坊の話は6時限目が終わった後にでもしてやろう。これは、約束だ」

「貴重なお時間を設けていただき、感謝します」

「砕けた口調で良いというのに…」

良くも悪くも、彼は真面目過ぎるといふ印象を受けた。

まあ、返っておちやらせるのが彼にとっての毒でもあるのだろう。

◇

ふとした瞬間に問う。

「ナターシャは何処で医療を？」

「……：蚩尤先生でしたか。急に話しかけると驚いてしまいます」

驚いた様子でナターシャは振り返る。少し体が跳ねていたので可愛らしいと心温まったが、実験中に声を掛けてしまったのは完全にこちらの非、すぐに謝った。

「すまない。実験中に声をかけてしまったな」

彼女の前にはいくつかのプラスチックと実験器具が置かれている。

何かを調合していたのか、目を離しているうちに、彼女が手にしているプラスチック内の液体の色は緑色の柔和した雰囲気液体になり、実験が成功した事が見られた。

「完成したのか？」

「素材を適量に調合したのでおそらく成功しているとは思いますが…：何処かの先生が

急に話しかけてきてしまったので、もしかしたら失敗しているかもしれません」

「すまない……」

「意地悪を言ってしまったね。すみません。…試しに飲んで行かれますか?…心配しないで下さい。ちよつとした滋養強壯作用があるだけです。もし、本当に失敗していたとしても身体に害はありません」

「俺には意味をなさないと思うが……」

「そう言えば、先生は奥さんからそういう祝福を受けているのでしたね」

「なんでも、永遠に愛し合いたいからだそうだ……」

「毎度聞いて思うのですが…彼女、重くないですか?」

少し引き攣った笑みで言うナターシャに、軽口を交えながら応える。

「五万年も付き合えば軽くなる」

「そういうものですか……それで、私が何処で医療を習ったか。でしたっけ?」

「ああ」

「簡単ですよ。私の養親が医者だったので、自然と興味を持ったんです。そこから、2人に簡単な応急処置から教えられて……この学院に入り、今は本格的な知識と技能を習っています」

「という事は、君も将来は医者に?」

「ええ、そのつもりです」

「何故なのか聞いても？」

「たくさんの苦しんでいる人を放つて置けないから…では駄目ですか？」

「駄目ではないよ。…ふふ、だが、俺の妻が聞けば喜ぶ精神性だろう。無論、俺もな…。ナターシヤに豊穡の加護があることを祈ろう…」

「ありがとうございます」

やんわりと彼女は笑って、実験道具の片付けを開始した。

私も突然の訪問の謝意を込めて、片付けを手伝うことにした。

◇

「ねえ見てよ先生！カカリアが私の誕生日にコレを作つて来てくれたんだよ！」

セーバルが興奮した様子で掲げるのはギター…らしきものだったが、いつもと形状が

違うことに気づいた。何より、色はセーバルらしからぬ、ちよつと落ち着いたイメージ。白黒の銀で裝飾され、クールという表現が正しいだろうか。

「いつもと形状が違うな……カカリアの自作か？」

「それはちよつと違うわね。元々、図面はセーバルが描いていたものよ。ただ、原材料が高価な物で……中々製作に踏み切れていなかったようだったから……私が作ることにした。これでも私、大守護者の後継者だからね。お金なら十分にあつたの」

満足した顔でそう語るカカリアの横には勝利のVサインが手によつて象られていた。いつ見てもこの2人の友情は眩しい……この場に俺が居てもいいものかと何度か思った事がある。

「こんな最高のプレゼントは今まで無かつたよ！本当にありがとう！カカリア！」

「私も貴女が喜んでくれて嬉しいわセーバル」

「つて、あんた先生にそれ言つていいの!？」

遅れてそう反応するセーバルに、何のことかと疑問に思うが、すぐに大守護者の件かと思いつく。

確かに、一応の一般人である俺にそんな事を伝えても良いものか？

「別にいいでしょう？……ここまで仲良くなつた先生だもの。それに、先生は空から来た宇宙人……？つて奴なんでしょう？……こんな国一つの秘密事なんて、結構知つてるんじゃない

いの？」

「いやまあ、確かに知ってはいるがそんな理由で重要な事を告げられてもな……」

「先生は私達に希望を持たせてくれた。寒波に脅かされているこの星にだって、いつかしてくれたの話のように、天外からくる開拓の神様がこの星を救ってくれるかもしれない。……そんなお話に頼らなくても大守護者になる私がこの星を救ってみせるとも思わせてくれた。……本当は不安だった事も、先生が話す物語で色々勇気付けられたの……それに、私は先生を悪い人だと思つてないわ。信頼出来る人だつて思つてる」

「そつか、カカリアがそう言うんなら問題ないね！私も先生の事は信頼してるよ。先生の話す物語から熱いロックを感じたしね！空の上の星々には色々な音楽があるつて事も知つたし、色々な技術が発展してるつても聞いた。だから私は、この星で自分のやる事を全部終えたら旅に出るつて決めたんだ！それがいつになるかは分からないけどね」

「抱える難問も多いと言うのに……よく言つたな。だが、喜ばしいと思つてしまうのは年寄りの思考か……この星の問題もお前達が生きているうちに解決すれば良いな」

「私の代で全てを終わらせて見せるわ！」

「私だつて、出来る限りカカリアのサポートをするよ！」

「流石、未来の大守護者様とその親友だな」

熱き決意を抱いた2人の女傑に、あらん限りの祝福を祈る。

盛り上がりついでに、スーパーエレクトリック演奏器でセーバルが新曲を披露してくれた。

素晴らしいライブが終わった後に、名前が長いと言う事で、スーパーエレクトリック演奏器は「エレキ」と名前が改められた。

因みに、騒音被害で監督責任のある私は少しばかりリーチエ先生から怒られた。勿論、カカリアもセーバルも怒られた。

まあ、放課後だからといって、好き勝手騒いでいいわけも無いからな……。

第5話 熱血（ガチ）

借家の鍵を閉め、家を出る。

街に行き交う人々に軽く挨拶をしながら、上層部と下層部を繋ぐケーブルカーに乗りこむ。

ケーブルカーに揺られている最中、乗っているのは己と老人だけだと気づく。

自分もまだ頭が覚醒していないらしい。うつらうつらと老人が舟を漕ぐように、自身の舟も揺られ心地のいいケーブルカーの中で一緒に遊覧船と行きたいところだが、完全に眠る前に上に着いたようだ。

本日は、一週間のうち唯一の休日である。

ケーブルカーから降り、通路に従って階段を上る。

本日も相変わらずの晴天であるが、肌寒いと感じるのはベロブルグ故の気候だろう。街中の温暖装置が起動しているのは日々の鉱夫達の苦労の賜物だろう。最近では地髓の枯渇が懸念されているが、まあなんとかなるだろう。階段を上り終えればそのまま右方面へ身体を向け、外縁通路へと足を運び出した。本日の目的地はちよつとしたカフェ

で生徒と待ち合わせだ。

道中、鬼ごっこをしてはしゃぐ子供や、荷物の整理をしている中年の男性、客寄せの澆刺とした声、掲示板を読む男の畝る音、ポストマンの疾走姿を見て今日も活気に満ちているなあと年寄りのような思考になる。

外縁通路を進み、行き当たりの角を6度くらいは曲がる。

とかくここは、少し迷路のように複雑なので、迷う者もしばしば居る。

最近では裂界の侵食もベロブルグへと入ってきているそうで、次はこの外縁通路などでは無いかとも言われている。そのおかげが人通りも少ない。

10分程か歩いて、ようやく小洒落た喫茶店に着いた。

客足は少なかつたので、お目当の人物をすぐに発見出来た。

それに何より、その人物は良い意味目立つのだ。

「待たせたな、カカリア」

机の上には先に頼んでおいたのかコーヒーが二つ置かれており、湯気が揺れている。

「それ程待っていませんよ蜚尤先生：朝早くに呼びつけて申し訳ありません」

出会い頭に謝罪をする彼女の姿は随分とカジユアルだ。制服との印象がまるで違う。軽い雰囲気といえれば良いか、服について特に詳しい表現はよく分からないが、似合っ

いると感じた。やはり、女性はそういうのに氣遣う者なんだろう。因みに薬師にお洒落という感覚は無く、いつも同じ格好であった。

「そう、敬語で喋る必要もないだろう。今日はどちらもオフの日だ。軽く話してもしよう」

「じゃあ…先生に聞くけど、これって本当に大丈夫なのかしら？奥さん何か言つてなかった？」

「何か言える距離でもなし。それに、やましい事など一つたりとてないだろう。男女の密会でもあるまい」

「そうね。私もこんなジジ臭い事を言う若い姿の彼氏なんて扱いがどうすればいいのかわからないわ」

「なかなか言うな。君は…」

「それじゃ、早速本題を話すわね」

気分を切り替えたようで、その目が少しばかり細くなる。

実は、彼女からの要件は事前に聞かされていらない。会った際に伝えるとは聞かされたが…。

既に、セーバルとの誕生日の品はエレキで済ませたので、プレゼント相談という訳でもないだろう。他にも、勉強について、進路についてと学業方面で考えてみたが、将

来ベロブルグの太守護者になる事が決定しているカカリアにとって、進路の心配は無し、勉学の方も太守護者たる自覚あつてか本人の努力もあり学院内でトップを維持している。学業方面では何の相談事もないだろう。ジェパードの様に軍事的な参考話を聞きに来た様子でも無し。

一体、何の話だというのか？

「今日、先生に来てもらったのは他でもない。私は外に行きたいの」
少しだけ、持っていたコーヒーマグが揺れる。

「ベロブルグ郊外の観測隊ならあると思うが…」
「私はそこに入る前に太守護者になってしまおうわ」

横目で周りの客を見やる。それ程大きな声で言った訳でもないで聞こえていない様だった。距離も離れているのも一つの要因だろう。

「そもそも、許可なしに郊外に出ることは犯罪だ」

「先生だつて、最初はその罪を犯したんでしょう？」

「俺は…」

「とにかく、一目でいいから外の現状を見てみたいの。城内の人達は話にならないわ。自覚を持ちなさいカカリア。貴方は近い未来太守護者になるのですよカカリア。そんな危険な事をさせられる訳がないでしょうカカリア。…もううんざりよ。太守護者に

なつたらデスクワークが常になるに決まつてるわ。もう、後がないの」

「あと3ヶ月で大学部も卒業だったな。そういえば」

「これから大守護者になる為の手続きやら儀式で学校にもまともに通えなくなるわ。勿論この事はセーバルだつて知つてる。…お願いよ先生。今日だつて色々なレッスンを前倒ししてようやく手に入れた休暇なの」

「何故そこまで外に拘る?」

「それは…」

「大守護者故に、外の現状を知るべきだとも思つたか? そんなものは君が専攻として扱つてゐる軍事史で腐るほど読んだだろうに。外は過去の民家と開墾の跡地が氷雪に埋まつている。現在であればその極寒に加え、裂界生物達の巣がそこらと出来上がつておる。氷像となつた人も裂界生物もいるだろう。悍ましくもな…。人類は1時間として生きていけん。特別な訓練をしてなければな…その訓練してるもの達ですら怪しいが…」

「蚩尤先生もそんな事言うのね…でも特別な訓練なら私も受けたわ。これでも私は軍人よ。幼い頃から受けた英才教育の中で槍術の扱いを受ける物があつたわ。勿論、今もそれを続けているし、並のものには負けない自信もある。実際、シルバーメインの小隊との作戦にも参加して無事作戦を終えれた経験もあるわ。自分の身だつて自分で守れ

る」

「第一、君の言う城内の人間のようには私も一人の引率者だ。危ない橋を渡らせるわけには……」

「先生は、元々星渡の民。大守護者様から与えられた仕事の筈、未来の大守護者たる私に言える義理はないんじゃないかしら？」

「無茶苦茶だ」

それ程までに行きたいのか。

どうしたものかと頭を悩ませる。

カカリアが何故そこまで外に興味を持っているのかはよく分からない。

だが、俺を頼る理由ならばおおよそ見当はつく。講談から、俺にある程度の戦闘能力がある事を知っているのだろう。何より、長く生きることと柔軟な対応をしてくれるんじゃないかという希望性、ベロブルグ外の者であるという比較的フットワークが軽い立場。……それらを加味しての思い切りの良さだろう。

大守護者の後継者をそんな危険なところへ連れて行くなど、グレーシヤが聞いたらどんな極刑を言い渡されるものか……銃殺刑もあり得るかもしれない……その程度で殺される祝福ではないが。

だが、引率者としての立場を捨てるならカカリアの案には乗っても良い。なにせ、借

家を借りる前までの俺の住居は外だった。ある程度の地図なら頭に入り込んでいて、それ程危険な裂界生物もないルートならば知っている。

果たして、可愛い生徒の願いを聞き入れるべきか…引率者としてもらった立場を優先すべきか…答えは案外簡単であった。

「……このコーヒー代を奢ってくれたら良しとしよう」

「やった！先生ならそう言ってくれと信じてたわ！」

「極寒の大地で少しとはいえ活動するんだ。十分な防寒具は身につけておけよ」

「勿論よ！」

オレグに見つかった際になんと言おうか。

「ほんつとに寒いわね！」

その言葉とは裏腹に明らかに声のトーンが変わっている。随分と興奮しているよう

だ。

本当に外への羨望があつたんだろうか。

「私、先生の言われた通り随分と厚着してきたのに、先生は相変わらずの服ね…寒くはないの？」

「前も講談で話したが、とある灼熱の世界で少しばかり面妖な技を手に入れてな。それ以降寒さにはとことん強くなった」

「そう言えば最初の講談で言っていたわね。もう二年も前の事だから忘れちゃつてたわ」

2年とは記憶が霞むほどに長いか…やはり認識が異なる。

「それで、どうなんだ？ 待望の外へ連れてこられた気分は？」

「イイ気分だわ…やつと、叶ったんですもの」

カカリアは燥ぐ。童心を取り戻したかの様に。だが、決して遊びだけで済ましてはいない。何か別の目的があつての事らしい。

最初こそは雪の感触を確かめ笑い、少し走つては転げては笑い…と普段の彼女からは想像出来ないほど無邪気で純粋な顔を見せていた。

だが、遂に辿り着いた過去の惨状を見た途端に、雰囲気が一変した。

過去の家屋に手を掛け物思いに耽り、誰かの遺品を見ては目を閉じて何かを黙祷す

る。

死体となって裂界生物に変容するも、氷像に閉じ込められた戦士の名残にも敬礼をした。

ペロブルグの次期大守護者として行動か、カカリア自身の考えがあつての行動か…それは分からないが、彼女は…長に立つべき人間だ。傲慢にもそう思った。

やがて、決心したように面を変えて、俺に向き直つて軽くそんなことを言う。

「ね、先生、あつちに行つてみない？」

「何？おい、待てそつちは…」

小走りで行くカカリアの後を追う。

突然の独断行動に少し焦りが募る。

「わあつ、綺麗…」

幸い、裂界生物は居なかつたようだ。

カカリアの眼前にはペロブルグの全景が観れており、夕陽が蜜柑色に街を装飾していた。街中では絶対に見れないほど綺麗な構図だった。これを絵として名付けるとしたら『落陽』だろうか。

「綺麗だな…」

当たり障りの無い言の葉を紡ぐ。絵画的表現には慣れていないし、何かを事細かに捉

えると言うのも自身は不向きだった。

「……守ってみせるわ。絶対に。この景色も、人々も。皆が幸せに暮らせる様に……綺麗な景色に心動かされてか、いつぞやの屋上でした決意を再び口に出した。

俗に言うセンチメンタルと言うやつか。

「決意は持てたか？」

「ええ……」

「もう十分だろう。戻る……」

「待って！」

「……何故だ？」

「まだ、ここに居させて……少しだけでいいから……」

「……いいだろう」

すると、カカリアはどうしたとか、踵を返して何やら地面に視線を移し始めた。

二歩、三歩とゆつくり歩き、何かを探しているようだった。

「……この辺りの筈なのに……」

暫くその様子を眺める。

そして理解した。彼女はなにも大守護者たる決意を持ちにきたわけでも、ただ遊びに来たわけでもない。

探し物をしに来たのだ。

思えば、ここに来てから前よりも地面を注視していた様に思う。ただ吹雪の風が強く、下を向いているだけかと思つたが、そうではなかったのだ。

家屋に入ったのも、念の為此の風で飛ばされてないか散策したかつたのだろう。

「一体、何を探しているんだ？」

実際に、問いかけてみる。

「そうね……ここまでしたら流石にバレちゃうわよね。……とあるイヤリングを探しに来たの」

「イヤリング？高価なものだったのか？」

「いいえ、買ったのはちよつとした骨董品店でそこまで高くもなかったわ。ただ、セーバルと一緒に買ったパールツクで、今まで大切にしていた物よ。私が月でセーバルが太陽を象つたイヤリングだった。ただ……ここに来る前のカフェで言つた、シルバーメインとして参加した作戦中に裂界生物に襲われてね。いつのまにか無くなつてたわ……アレは、私の守り神みたいなものだね……不思議とそのイヤリングを付けていると不幸に見舞われないの」

「そうか……そんな大切な物を探すのに、チャンスはこの日しか無かつた訳か……」

「ええそうよ。なんとしてでも今日探すの。例えこの腕が凍りつこうとも、先生が呆

れて先に帰ろうとも探し出すつもりだったわ！」

「豪胆な女傑か君は。流石、未来の大守護者様と呼べばいいか？」

「好きに言っつてちょうだい！」

「ははは！まあ、その気概は気に入った。その覚悟に免じて手を貸してやろう」

「本当に!?!」

「ああ、では早速、俺の秘技を見せるとしようか」

「秘技？」

「まあ、そんな大層なものでもないが……」

灼熱の世界で得たという生命の業火だ。もつとも威力は本来の物と比べると大層低い。

精々、ここら近辺の雪を一気に融解させる程度のものだ。

掌から火種ヒを取り出し空に掲げる。右手にその火種を握り込ませ、少し大袈裟にばら撒いた。

するとどうだ、みるみるうちに銀世界は消え失せ、残ったのは久しく見ていなかった土の色の地面だ。

「それが先生の言っていた。灼熱世界の炎……暖かい……」

「これで、見えもしやすい。活動もしやすいだろう？存分に探せ」

「ありがとう…蛭丸先生」

そこから2人で、ありとあらゆる場所を探した。

光り物ということで光源である炎も出して、反射光がないかと2人で目を張り探した。

探している途中、気温が高くなった状態で厚着で行動していたため、汗を掻き、服を脱ぎ始めたカカリアの着脱は極力見ないようにしながらもイヤリングがないか探して、少しばかりお小言を貰いつつも探した。

徐々に搜索範囲も拡大していき、小一時間ばかりの時間が経った頃。

漸く、カカリアの方から吉報が届いた。

「あつた…!!あつたわ!!先生!」

「何!本当か!」

「ええ。ただ、月の形をした部分が綺麗に欠けている状態だったけれど…」

装着部分のみが残り、大切な装飾部分は何かに切り取られた後の様に無かった。

一体誰が…と考えたところで直ぐにあの永冬の災影の仕業だろうと察しがついた。戦闘中に落としたということなので、その可能性は高い。なにより、カカリアがしているイヤリングはノンホールイヤリングだった。これでは激しい動きを必要とする戦闘をすれば落ちてしまうだろう。まあ、それも分かっていたんだろうが、魔除けの意味も

あつてつけていたんだろう。

「……そうか……でも近くにあるかもしれない。まだ探してみよう」

「そうね。まだ、私だって諦めてないわ」

その後、結局月の形をした部分は見つからなかった。

最後まで諦めず汗だくになって探していたカカリアの姿が脳裏に焼き付いている。

明日の朝にまで探す勢いだったが……流星に異変に気付いたシルバーメインに見つかり、共に大目玉を食らった。

特に、グレーシヤの怒りは凄まじく俺でも萎縮したものだ。

お陰で、2週間の謹慎処分を喰らい、俺は暫く下層部の人たちと共に暮らすことになった。

カカリアが珍しく目を腫らした姿は……多分、今後見ることは無いだろう。

第6話 医者と医者

事の顛末を話し、カカリアとともにセーバルに爆笑されてから三週間。

カカリアはもう学園では余り見かけられることはなくなつてしまつたが、それでも連絡はセーバルを通して取っている。中々に大守護者になるための手続きとは大変のようで、連絡は事あるごとに遅れているらしい。

それを聞いて思い出すのは、グレーシャの執務室で文字通り山の如く積み上がったいた書類の量、誰の目から見ても大守護者という道は過酷である事は想像に難くない。

長の立場となつてか、それに何処と無くあの坊ボツを思い出した。……あのお転婆の龍女から偽の診断書も作つて仕事をサボりたくなるのも頷ける。俺であつたらまずそのよ
うな立場に就かない。

自分は根無し草の放浪者が一番だろう。蚩尤はそう考えた。

同時に、カカリアを心配し始める。2ヶ月くらい前の話だが、カカリアは自分の横つ腹を気にしていた。

理由としては簡単で、大守護者になる以上正装で過ごさねばならず、その正装が横つ

腹から太ももにかけて露出したような奇抜なデザインであり、これからデスクワーク中心の環境になる為、太る事を懸念しているのである。カカリアとて女性、それも見た目も麗しい美女であると蛭尤も分かっている。中々の屈辱ではないかと：グレーシャに問い質したところ、体調管理をしっかりとしなければ、長としての示しもつかず、女性としての恥辱も味わう：故に基礎とした生活基盤が安定するという：なんとも強引な痴態対策と体調管理法であつた。

横の露出部分以外にも問題は数多くあると蛭尤は感じていた。そもそも、横つ腹以外にも肩を露出させているし、着ている服を一枚でも剥がせば肢体の形がくつきりと分かる妙に危ないところを攻めた黒いハイグレだ。それも結構透けている。足も同様に黒ストで結構透けている。しかも何故太ももを強調するようにパツパツなんだ。

肌触り滑らかな白生地の前掛けと勲章を飾り付ける為の緑の帯を除けばそれこそカカリアは痴女である。街中の女性でもそんな奇抜な格好はしていない。大守護者だけ倫理が可笑しいと蛭尤は猛抗議したが、それが伝統だとグレーシャに言い通せられた時は建創者達の歴史に寒々とした感情を向けたものだ。

ともかくまあ、カカリアへの心配はそんな所だ。カカリアからは「父親じゃないんだから：そんな事でグレーシャ様に抗議するなんて：全く何考えてるのよ。でも、ありがとね先生。私もちよつと：つて思つてたから嬉しかったわ」と苦笑混じりに言われた。

一先ず納得はしてないが、許容はしたのでカカリアの衣服の件は当分放っておくことにした。

気分を切り替え、また今日も講談にて世界の一事を語る。

◇

「あの、蛭尤先生。大丈夫ですか？」

「……………ああ」

返事が遅れているし、そもそも声に覇気が無い。何より、こちらを見る目はぼんやりとしていて、濁っている。目の隈も酷い有様だ。

ナターシャはここまで弱った蛭尤の姿を初めて見た。

「一体何日間寝てないんですか？」

「2ヶ月」

ふむ…と少し考える。

端的に考えても、不眠症なのは明らかだった。

「心的要因ですか？それとも…物理的な？」

「……物理的要因以外にあるか？5万年も生きて、5000だった若かりし頃ならまだしも、感情に振り回されるような事は5桁をいってからそもそもない。単純に睡眠の時間が取れていないだけだ…」

感情に振り回されていまいと云っておきながら、その発言には若干の苛立ちがあった。

今まで物腰柔らかかで優しいイメージがある蛭尤先生の声からは想像も出来ない声だ。

「…一体何故そんな激務を？先生は講談を終えればそのまま校内をほつき歩くような暇人ではなかったのですか？」

「言い方……まあ当たっているがな。…俺が謹慎から解かれた後…2ヶ月と10日くらい前だったか。下層部の重鎮から依頼があつてな。下層部の方でも蛭尤殿の講談を開いて欲しい、とのことだった。君の言うように暇人だった俺は二つ返事で了承し、リーチエ先生と共に細かい日程を決め、実際に講談の場に立った。するとどうだ、並々ならぬ人集りが出来ているじゃないか。元々、下層部の学園に通えない子供達を中心に話を聞かせるという約束だったものが、普段の講演の拡張版みたくなってな……」

「それで、人気を集め、ペロブルグ各市内で引つ張りだこ状態になった訳ですね」

「ああ、その通りだよ。名探偵ナターシャ」

「答えをそのまま教えてもらつたのに名探偵とは馬鹿にしてるのかしら?」
「すまん。そんなつもりはなかつた」

私が少しでも怒つた振りをすると、彼は顔を青くして、途端に後ろ手になる。

その様子が年上と理解してても愛らしくて癖になる。こういうおふざけも何度かしてるのに、彼は一向に慣れていない様だ。

冗談だと伝えてお茶を濁した。

「ふふつ、軽い冗談ですよ」

「君の笑顔は偶に俺の嫁を想起させるからやめてくれ」

「毎回、聞いて思うんですが、そんな恐妻ですか?」

「普段はこの宇宙の誰よりも慈悲深く慈愛に満ちた心を持つてしていると断言しよう。俺が絡むと途端に人間臭くなる嫉妬深い女だ」

急に惚気られ、苦笑するしかない。

彼に妻が居る事を知っている生徒は大多数だが、恐妻であり宇宙の神々の一柱である事はあまり知られていない。

ペロブルグ内で知っているのはただ唯一、ナターシャだけだ。

蚩尤先生が何故自分にだけこんな話すのかは、よく分からない。理由を聞いてみると『そうだなあ…なんと言えば良いか。君は俺の妻に似ている。それは雰囲気か、接し方

か：君と話していると妻を思い出す。だから、口が軽くなってしまふのかも知れないな』……と言っていた。

しかし、私がそんな神さまと似ているとはとても思えない。自分はそんな存在ではないし、薬師という神が目指す全宇宙から死滅と衰弱、厄災を無くすなんていう壮大な目標がある訳ではないし、そんな力もない。私の力は酷く小さく、出来ることも限られている。蚩尤先生はそれを完全に否定したけれど。未だに私は彼の言葉を半信半疑に思っている。

「……話は戻りますが、休まないんですか？」

「そうだな……当分休むつもりはない」

「どうしてですか？ 蚩尤先生がそんなに身を削る事でもないと思いますが……」

「……ことベロブルグに於いて、娯楽が極端に少ない事はわかった。精々が読書、音楽、演劇、大道芸といった具合だ。それらも他の星と比べれば数も少なく、質も高いとは言いがたい。他の星へ行けば電子の世界が広がり遊びの幅が多種多様に増えている、より高度なスポーツ格闘技の観戦も盛り上がりを見せているし、ある星では寶石達の開くカーニバルが開催され、またある星では雪を造形し様々な形で人々に見せ合う祭りもあつた。ベロブルグに於いてそんな祭りなど資源の無駄であるし出来るわけもない。人口問題だつて食料問題だつて山積みだ。この狭い範囲内で作物を育てることも難し

く、下層部ではイモリ焼きが豪勢な食事だった。とにかく、寒波という天災と裂界の侵食であらゆる文明の停滞と娯楽の欠如が激しい。そこで現れたのが俺の講演だ。傲慢に思ってしまうが、俺の経験は聞いていて面白いらしい。とある監督が酷く感動したと言つて、俺の経験を元に作成した芝居が黄金シアターで開演されるそうさ。とある小説家も俺の話を軸に新たな一次創作を手掛けようとしていた。：それから俺はベロブルグの娯楽発展の一助になろうと、そう約束したのだ。下層部の重鎮、ヒイロ殿とな」

「あの方が……いえ、蛭尤先生、ヒイロさんがそんな四六時中働け、と無理を言う人にはとても思えません。お身体を無理になさらぬように、あるいは、暇がある時でいいと言つてませんでしたか？」

「……ああ。本当に名探偵だよ君は、その通りだ。何もここまで無理しろなど誰一人として言つたらん。俺が勝手に無理をしているだけに過ぎない」

バツの悪そうな顔をしながら言ったのでどうやら本当のことらしい。

少し子供の様に拗ねた声色に変化したので、彼らしくないと内心思ってしまった。

蛭尤先生の新たな一面を知れることに嬉しくなる一方、無理をする彼の姿に呆れと怒りが同時に湧いてくる。

「何故ですか？ 蛭尤先生が自分の身と時間を削り、ベロブルグの市民に対してここまでする理由が分かりません。時間にもつと余裕を持たせて、しっかりとした休憩時間を

挟みながら講演をやった方が確実に良い筈です」

「ナターシャの言う通りだと自分でも思うよ。……だが、俺自身やっていて楽しいと思ってしまうのだ。それに、講談を終えると残念そうにこちらを見る子供達の姿を見るとな……もつと頑張らねばと活力が湧いてくる。……それに元々不死の肉体だ。疲れ知らずというわけではないが、幾らでも無茶は出来る。だから、どうか許して欲しい」
彼の瞳が許しを請う様な、懇願する様な情けない瞳で私を射抜いてくる。教師が生徒に向けて良い視線の類では無い。

これじゃまるで……親密な関係の男女の類ではないか……？

彼に見つめられていると分かると仄かに顔が熱くなる。彼は妻帯者と頭に何度も呟かせて、ざわつく気持ちを落ち着かせる。

分かっているつもりだ。分かっているつもりなのに、勘違いを起こしてしまう。

それは私だけの特権。彼の事を他よりも知っていると言う権能があるから……彼が私の事を妻の雰囲気とよく似ていると言ってくれるから……彼が、私の事をよく見てくれるから……変な勘違いを起こしてしまう。

本当にタチの悪い先生だ。

初対面の時はただの面白い先生だった筈だ。星々の輝きに触れ、私達に無限の可能性という毒を与えた張本人。

その毒は酷く甘くて、私も宇宙の冒険にときめいてしまったことがある。

今は、ベロブルグの人々から痛みと苦しみを全て取り除く手助けをするという明確な目標を抱いているが、それでも一度だけ全て放り出して宇宙の輝きに触れてしまいたくなつたのも事実。若気の至りだと反芻し、過去の己を何度叱責したことが。

見当違いにも程があるが、私は彼を少し恨んでしまっていた。

彼は、私の養父を不治の病から救ってくれた恩師だというのに……。

私の養父は今までのベロブルグの医療では治療出来ない大病を患っていた。

発症当初は幾つかの医療機関を当たり、原因を究明しようとしたが、何の病気かも不明で分からずじまいに終わってしまった。その結果、対処療法を行って看病するしかない事態に陥った。私と母が看病に当たり、義兄のヴァフも必死に治療方法を探していたが、そもそもそんな治療法などベロブルグに伝わっていなかったのどうしようもなかった。日に日に体調が悪くなる父に、私は母の看病を手伝う以外何も出来ず無力感に苛まれていた。そこで、頼ったのが当時恨んでいた蚩尤先生だった。

彼は医者だった。それはある講談の時に偶然聞けた吉報であり、最後の賭けだった。

私は先生に事の経緯を説明し、何か知っていることはないか、何か出来ることはないかと相談した。彼はこれを二つ返事で了承し、実際に家へ訪れ、見事症状を突き止めた。

そして結果は、父の完治という喜ばしい成果だった。

ベロブルグには伝わっていないが、他の星では医療法がすっかりと確立されていたのだ。ベロブルグ特有の風土病ならまだしも、父の患っていた病は宇宙でも比較的知名度の高い代物であり、閉鎖的なヤリーロVにはそれが伝わっていないただけの样だった。

この時、彼には感謝しても仕切れない程の恩が出来てしまった。家族も皆蚩尤先生に感謝し、それなりの交流を持つ関係になった。偶にだが蚩尤先生は私の家へやってくる。私たちの家族と中々相性の良い様で、異星の医療技術や理論なんかを聞いてはベロブルグの医療に取り入れようと父と母、そして私と兄は邁進している。

……分かつていた。彼が養父を救った時に、友愛以上の眼で彼を視てしまっている事を。

あの夜、無力感で苛まれていた私に胸を貸してくれた彼に……安心を覚えてしまった事を。

だから、今の彼の発言に納得いかなかった。

自分らしくない激情が沸々と湧いてくる。ああ、なんて醜い女なんだろうなと自己嫌悪に陥り、言葉を喋っていいか、一瞬だけ戸惑う。

一瞬の空白の後、情けない目に情けない声で返した。

「私は……蚩尤先生に無茶をして欲しくありませんッ……」

嗚呼、声が自然と震えてしまう。何故泣いているのか自分でも理解が遅れる。さつきまで、普通に喋っていた筈なのに。

きつと困惑しているのだろう、滲んだ視界からも彼の困惑している表情が読み取れた。

「例え、貴方の肉体が不死の身体でもッ……。今つ、貴方がこんなに苦しんでるじゃないですかッ……!」

感情が抑えられない。なんで今こんな……ちよつとした言い争いで発露してしまったのか、分からない。

「2ヶ月の徹夜なんて苦にもならない。酷い経験を、もしかしたら五万年の時の中で何度も経験しているのかもしれない。酷い経験を、もしかしたら五万年の時の中で……!」

嗚呼、本当に酷い女だ私は、彼の苦しみなんて一欠片も理解してない筈なのに、理解した風な口で、彼を責めているんだから。

「それでも私は!貴方が苦しんでいる姿を見たくありませんッ!!」

私自身、自分が出したのか疑問に思うほど、キリキリと苦しんだ大きな声だった。

もう余りこんな顔を彼に見せたくなくて、言い切つたと同時に顔を背ける。

「……蚩尤先生の子供達に向ける気持ちと、私たちベロブルグの市民の為を思つてやってくれるその気持ちはとてもありがたいです。だけど……だけどっ！……そんな自暴自棄なやり方でこちらが喜ぶと思つていますかッ……！私は今っ！……こんなにも悲しみ、怒つているんですよ!!」

何故、その声が濡れている。何故、眼から大粒の雫が零れ落ちる。

蚩尤は突然の涙に混乱を招いていた。

ナターシャからは聞いたことのない声量で叫ばれ、ただ叱責され怒られていることは分かったが、悲しまれる事をした覚えはない。ただちよつと2ヶ月ぼっちの間無理をしているだけという認識の蚩尤にとっては分からない状況だった。

「待て待て待て！何故泣いている？2ヶ月寝てないとは言つたが実際は5分ほどの仮眠は毎日摂つて……」

「蚩尤先生、そんな気休めにもならない事を言わないでください！たつた5分の仮眠ですか？そんな暇が取れるのであれば！最低10時間は強制的に寝てもらいます！」

「えっ。おい、待て待て待て。流石に10時間も取るわけには……せめて3時間に……」

「医者に指図する気ですか？」

「……」

ゾクリと背筋が震える。

ああ……この感覚は久しく味わっていなかった。やはり彼女は何処と無く薬師に似ている。

「今、私以外の女性の事を考えましたよね？」

えっ。

「えっ」

本当に薬師みたいなんだが。なんだこの子、俺が認知してないだけで薬師の分身体か何かか？

「また、考えましたね。こうなったからには蛭尤先生にはとことん寝てもらいます」

「………はあく。仕方ないな。一眠りしよう、ゆっくりとな。しかし、この後の予定を大幅にズラす為、少しばかりリーチエ先生と話したい。それまでは待つてくれ」

こうなった場合、俺の出来ることは精々機嫌を損ねず彼女達の言う事を素直に聞くぐらいだ。どうする事も出来ないと思ったので、渋々とだが、ナターシャの提案に乗ることにした。女の涙程、勝てない武器はないのだから仕方ない。

「ふふ……やっとその気になってくれましたね。それじゃあ、私は蛭尤先生の家で待つ

ていますから」

は？

「は？待ってくれ。何故俺の家なんだ？」

そもそもどうして俺の家を知って……ああ、俺がこの前教えていたな。もし困ったことがあればいつでも相談に乗るという事で教えてたな……はあくあ。

「蚩尤先生がちゃんと寝ているか、確認するためです。それに、もしかしたらこれまでストレスで変に眠れなくなっている可能性もあるので、少しは安心するところが良いかなと思います、それに私が癒しの効果も与えてリラックスさせようと……」

「癒しの効果など与えなくても俺は寝る時はちゃんと寝られるぞ」

「蚩尤先生が2ヶ月も我儘を通したんです。私もほんのひと時だけ、我儘を通させてもらいます」

「……聞くが、癒しを与えるというのはどんな？」

「知っているかと思いますが、人はハグをするとβエンドルフィンやオキシトシン、ドーパミンなど幸せの麻薬というホルモンが分泌されます。ストレスの軽減や、多幸感の充実、ポジティブ思考になりやすくなるなど、良い効果が沢山あります。それを試す予定です」

「待て待て待て！ナターシャ、君の年は今年で19だろう!?まだ結婚もしていない

女子が、こんな年老いたじじいを相手にそんな事をして…

「私がしたいからです。貴方に。さつき、先生もそうしたいから講談されていると仰っていましたよね？」

さつきまでの涙は何処へ流れ落ちたのか、彼女の瞳は決意に満ちている。自分の持っている経験と語彙では覆せそうにない。

そもそも、対人関係自体は五万年の時に反比例して短いのだ俺は。薬師が基本傍にいたお陰で、女とこういったやり取りしたことが皆無。全くどう断れば良いのか分からない。

「……………もう好きにしろ」

「はい♪好きにさせてもらいます♪」

弾んだ声でそう言うナターシャに蚩尤は何処と無くあの妻を思い浮かべた。

やはり何処か似ている。そして、安心する。五万年の時の中、彼を愛していると言ってくれたのは、唯一薬師だけだったから。

ナターシャとの添い寝は…悪いものではなかった。ここ200年はしていなかった快眠であった。

第7話 発覚した秘密

Kのイニシャルを持つ者はどうしてこんなにも強いのか…。まるで分からん。

アレはまさしく救世と終焉を再現したかの様な存在だった。俺が相手では相手の7割を出せたら良い方だろう。実際、7割も出せていたのかも怪しいが。

ふう…それにしても、酷い目に遭った。反面、久々に全力の運動をした充足感もある。何故、彼と彼女が俺と邂逅したかは分からないが夢の中の事だ、霞と消えていくのが理であるが…生憎夢だろうが全ての記憶は覚えている始末。星神以外で俺をここまで追い込み、痛めつけたのは彼女達が初だ、完全記憶能力なんて持つていなくても一生モノの夢だろう。

ともかくまあ、久々の運動した感覚もあり快眠であった。

目が覚めた瞬間にナターシャの寝顔が目前に無ければな!!!

気分は酒の過ちで浮気をした夫の気分だ…。

…額から冷や汗が垂れる。

昨日は何故あんな事を許し、一緒に添い寝なぞしてしまったのだろうか…？

寝不足だったのは認めるが幾らなんでも……いや、もう後悔するのも遅いな。

添い寝する事自体はまだ良い方だ。俺が怒られるだけで済むし、幾日か監禁され薬師に搾られるがそれぐらいどうという事はない。

問題はナターシャが俺を好いているという事だ。コレは自惚れではない。とある人物から教わった読心術を駆使した物だ。神には通じなかつたが人であれば誰でも通じる。ナターシャとて例外ではない。

因みにこの技術を教えた人物は生命力が満ち溢れた大自然にモンスターが闊歩している世界でハンターを生業としている人だ。確かレジエンドラストという猟団に所属していたフラウという人物だった。薬師が気に入っている世界でもあり、交流は盛んだ。ちなみにフラウは女性だが師弟関係に近かつたのでキツイお咎めは無かつた。語るのに小一時間ほど必要な軽い罰ならあつたが。

その星の生命体は長命種ほど長生という訳ではないが、薬師の求めた豊穡自然との共生の形が一つ成就した生態をしている。俺もそこで600年余り世話になつたことがある。

まあ、その話はさて置き、薬師にナターシャとの事が暴かれたらどうするか……という話の方が重要だ。

薬師にバレる事が前提なのは、神に隠し事なぞ出来ないと確信しているからだ。

と言つてもやる事は決まつている。……全力で薬師を説得し俺だけの被害で落ち着

かせるのみ。力押しではまず無理だからな……特に俺と女が絡んだ時の薬師はナヌークであつても止められはしないだろう。

ナターシャに被害が及ばない事が最低条件だ。その為には出来る事は何でもせねば……。最悪己の身体を何千年と薬師に預ける事になつてもだ。

もしナターシャに被害が出るとしたら……長命種にされる事だろうか？まだそれでは軽いほうだが……俺と彼女では元の身体の勝手も違えば薬師の一瞥から得られる力も違う。恐らく仙舟の民と同等の身体を得る。そして間違いなく魔陰の身は彼女を蝕む。

……その時に介錯するのはこんな運命に付き合わせてしまった俺の責任だろう。

……いつになるか分からないが、その時になるのが怖いな。別れはいつだって慣れないものだ。

暗い話を続けてもしようがない。結局、この100年の間で薬師に会うかどうかが問題だ。ここ200年は薬師に会っていないし、奴が変な女の勘を発動させなければ早々にバレルことも無いだろう。300年に一度の再会にもまだ猶予はある。

もし、事が暴かれれば……ナターシャに被害が及ばない事を祈るばかりだ。……夫であるというのに、妻に対して全く持つて強気に出れないとはなあ。情けない事この上な

い。

ともかく、先に目覚めてしまったんだ。客人を出迎えるのが礼儀だろう。ナターシャを起こさないようそつと立ち上がり、調理場へと赴いた。今日は少し豪勢に行くか。

ベロブルグにおいて、穀物は重要な生命線だ。

この限られた土地で育てられる土地も狭く、人は増える一方でも薄氷の上でギリギリ安定的な食糧を供給できているのだから。

最近はどうん値上げしてしまっているのはどうしようもない事だ。なにせ、裂界もベロブルグ市内で広がり始めた。耕地にまだ広がっていないのが救いだが、運送ルートは幾つか潰れ、住居を追い出され路頭に迷う人達の受け入れ先もまだ定まっておらず、人手不足も増える一方、他にも色々めちやくちやな状況だ。物価の高騰はコレからも続くだろうし……カリアはこの状況をどう切り崩していくのか……。

ああ、また暗い話をしてしまった。

いかんなあ……。独り言でさえこんな話をしてしまうとは……やはり精神的疲労でも溜まっていたのか。

とにかく、朝食を作ろう。今日はフレンチトーストだ。

ナターシャは甘味の類が好物だと知り合いの女子生徒が教えてくれたので思いついた。丁度パンも牛乳も卵もある。

パンを4枚用意し、卵を割りボウルに入れ、牛乳を注ぎ込みかき混ぜる。

卵もかなり貴重品だ。週に何回か売りに出されるだけで珍しく、主婦の間では我先にと小競り合いが起こるのが市場での常であり、歴戦の猛者達主編から俺も勝ち取った品だ。

中々にかき混ぜた後、パンの両面に卵液を浸し漬け込む。

しつかりと染み込むまでに、経費削減もとい、調理用鋳石代削減の為、己の体を燃やしフライパンを熱する。

熱したフライパンにバターを乗せ、全面に広がるように泳がす。

そろそろパンにも卵液が染み込んだ頃なので、フライパンの上に乗せ焼き上げる。

焼き色がついたらひっくり返し、また焼き色がついたら皿に乗せ、蜂蜜なり粉糖を振りかければ仕上がり…であるが、サトウキビを作るほど温暖でもなく、蜂蜜はこの世界では蜂が生きていける程優しくなく、また貿易で入手するなんぞこの世界では出来るはずもない。まさに八方塞がり…などところで、蚩尤が虚空に手をつ込んだ。

手首から先は光の靄により切断された様に一見見えるが、これは四次元バッグの食料スペースに接続しただけである。(ゲームで開拓者達が武器を取り出したり仕舞つてる待機モーションなんかでよく見られるだろうアレだ)これはスターピースカンパニーに

より様々な形で売られている全宇宙誰でも使える日常道具である。プレスレットだったりイヤリングだったりと装着型もあれば、ちゃんと青狸よろしくポケットとして縫い付けて使う物もある。最も一般的な物は携帯のアプリとしての搭載されているものだ。当然、蚩尤も保持しているし、鎖国的な環境下にあるペロブルグの民ですら使っている。そして取り出したのは袋、袋的なものから袋を取り出すとは些か二度手間なマトリョシカを彷彿とさせるが、どうでもいい事である。袋はとても小さく、中に入っているものなど高が知れているが、今この場にとっては最高の奏者であった。

「まさか本当に使う機会が訪れるとはな…流石は天舶司の接渡使。仙舟の貿易に一際貢献しているだけはある。商人の勘と言っていたが…汎用性の高さで買いかぶっているだけか…？いやしかし、この状況でこれが出てくるとなると、運命が働いたと思えんな。…ともかく、あの狐のお嬢には礼を言っておかねばならんな。孤族だから早くに行かんと。まあ、俺が訪れても丁度いるかどうかも分からんか」

袋の中身は宇宙砂糖だ。通常の砂糖とは更に逸脱した長期保存能力を有している。味に大差はないが、仙舟人からすれば、いつのまにか買って忘れていた調味料がまた使えるのだから、重宝されている。

中途半端な仕上がりだったフレンチトーストに砂糖を振りかけ、1枚目が完成した。砂糖を振りかけたただけだというのに料理の質が格段に上がったのは気のせいではな

い。砂糖の有無とはそれだけ雲泥の差なのだ。

あとはこれを三回繰り返すだけである。

フレンチトーストを作っている最中、その甘美な香りに誘われたのか、未だ夢半ばと
いった様子のナターシャが口に手を添えてあくびしながらリビングへと訪れた。

「…おはようございます。蜚尤先生」

「ああ、おはよう。ナターシャ。昨日は世話になったな」

「ふふつ、いいえ。…朝食を作っていたのですか？ありがとうございます」

「気にする事はない。君が押しかけたとはいえ、客人である事には変わりないからな」

「あら、人聞きの悪い」

ナターシャにそう言われた所で4枚目が出来上がった。3枚目に出来上がったもの
の上に乗せ、同じように砂糖を振りかける。それを見てかナターシャが驚嘆の声を上げ
る。

「先生っ！それってまさか…」

「ほう。知っているのか？流石は博識なナターシャだな」

「砂糖…ですよね。でも普及していたのはスターピースカンパニーとの貿易が続いて

いた大昔の筈ですし、この星で産地だった場所も既に氷雪に閉ざされていると記されていたのですが……一体どこから？」

「俺の数多い伝手の中からは。と言っても、これを持っていたのは偶然に等しく、再入手は今では困難だぞ」

「そんな貴重な物をどうして朝食のパンに……」

「大事な生徒のナターシャを迎え入れるからな。これくらいの豪勢な事はする」

「……しっかりと味わわせて貰いますね」

「ああ、数は少ないが、存分に食べるといい」

そのまま食事に手をつけるかと思つたが、「その前に洗面所が何処か教えてくれませんか？」と問われ、素直に答えるとナターシャはまずそこへ向かった。

成る程、あのお嬢が言っていた事は正しかった。「女性というのは身なりに気を使うものです。特に意中の殿方の前であればあるほど気をつけます。勿論私もですよ？」とウインクをしながらこちらに言ってきた当時を思い出す。……今までの判断材料が少なく俺と同類の様な相手ばかりであった為、一々そんな面倒な事をするか？……と思つていたのだが、十代の若者だつて気をつけているのだ。「若ければ若いほど。ですよ……そんな事も言われたか。……まあ、自然と穢れが浄化されてしまう薬師お手製の身体してゐるから俺は。五万年もソレであつたら感覚も狂うだろう。」

だから仕方ないのでは？「何言ってるんですか。貴方も気をつけてください。ご尊顔が安くなつてしまいますよ？」

いただきます。と感謝の祝詞を上げてから口につけると、柔らかくふわふわとした食感とほのかに甘く蕩ける味が口に広がる。

中々上手く出来た様で何よりだ。と頭の中を頷かせる。

ナターシヤも美味な様で頬を緩ませながらソレを頬張り、大事に一口ずつしつかりと噛み締めて味わっている様だ。

平和なこのひと時に水を差す訳にもいかず、先ほどまで考えていた薬師の件、そして彼女の好意に応えるための此方の誠意をどう伝えていこうか……食事を楽しんでいるナターシヤとは裏腹に悶々としたまま、俺は食べていた。

時が流れる事10分ばかりが経過、普段味わえない美味であるが故に食べ終わるまでの時間は少し遅かった。

既にナターシヤは「ご馳走さまでした」と拍手を交えながら言い、頼んでもいないのに食器を片付けてくれていた。

「すまないな。本来であれば家主である俺が片付けるべきなのに」

「いいんですよこれくらい。それに、貴方の役に立ちたいですから」

少しだけナターシャとの距離感が近くなつたのを感じる。前までの彼女であれば貴方の役に立ちたいなどと面と向かつて言わなかつただろう。本人の性格から率先して食器の片付けは行いそうではあるが。

ナターシャを見ていて思う。果たしてこれは進めても良い段階なのか、と。正直なところ、まだ話し合うべきではない感情の方が強い。事を急いでいる訳でもない。かといつて、放つておいて良い物でもない。

薬師と俺は多少なりとも繋がりがある。それは夫婦の絆と呼べる可愛い代物ではない。もつと物理的な繋がりであり、執着心の悍ましさが垣間見える。それは、お互いの位置が分かるというもの。どの方位に、どれくらいの距離で薬師が存在しているのか、今でもとつともなく正確に感じ取れている。

神が一個人に与える影響として計り知れない賜物。M.S. ヘルタのような星神について研究している天才クラブのメンバー達からは涎が垂れる程の代物だろう。実際、拘束されていた時期が一時期ある。

この繋がりは感情さえある程度通じる。だが、その繋がりには門というものがあつて、どれ程相手に心を許しているかで通じ合う心の機微は異なる。俺はその門を殆ど閉じており、薬師にはあまり感情を届けていない。感じるのは俺が大きな感情を動かした時

だけだろう。逆に薬師は全開だ。開きっぱなしと言っている。お陰で純度100%の愛しさと切なさど寂しさがこっちに伝わってくる。

因みにこれは薬師と俺が別れる時に薬師から付けた繋がりだ。一体どんな虚数エネルギーを使ったのか見当もつかないが、厄介なものであることに変わりはない。

何が言いたいかというと、殆ど閉じてるとはいえ、薬師にいつ勘付かれてもおかしくないという事だ。

タイムリミットは100年。正確にはあと98年か。この星から出て行くのと薬師に再会する瞬間は同じだ。その間まで隠し通せるのかという不安がある。

ナターシャの寿命は…本人の医者としての活動もあるが…ヤリーロVIの現在の衛生環境と生活環境を考えて、何も無ければあと生きて75〜80年か。…相変わらず嫌な眼を持ってしまったものだな。

隠し通したのなら特に問題はない、再会した時に精々『何故吾との繋がりを断つのか…吾は寂しかったぞ。無限に等しく其方に愛を囁いたのに…』と小言を言われるくらいだろう。…若干怪しまれるかもしれないが。

バれてしまったらその時はその時で腹をくくるしかない。

結局、薬師が来た時点で俺とナターシャは詰んでいるのだ。

神に人間の理解は無い。逆も等しく、人間も神に理解が無い。ただ畏怖し敬服し、知

ろうとしているだけである。

M.S. ヘルタにこの事を言ったら、「その通りね。でも、私はそれだけで終わらないから。覚悟してなさい。星神も貴方の事も全部調べ上げてあげる」なんて返されたか。

俺自身の過去をどう知ったのか？古参の星神くらいしか知らなそうだが、案外知られているものだ…。

今、この話はいいか。

この問題はどう転がる事やら、ナターシャが俺を諦めてくれれば丸く収まるんだが…点いた恋火は烈火の如く、消火は容易では無いと知っている。

やんわり断るのも手だが、それだけで諦めるような子じやない事は知っている。彼女が諦めつくのはこちらが誠意を持って確かな感情と考えの中で否定された時のみだろう。

「そういえば蛭尤先生」

食器を洗い終えたのかタオルで手を拭いながらナターシャが問いかけてきた。

「ん？どうした」

「蛭尤先生が干していた洗濯物の中に明らかに女性物のコートがあつたんですが…あれは蛭尤先生の妻の物ですか？」

「あー……アレか。アレは違う。俺の私物だ。譲りものだがな」

「それにしても、サイズが合っていないようでしたが？」

「……………」

「蛭尤先生？どうしました？」

「ナターシャ」

「はい？」

「俺が薬師から様々な祝福を受け身体が色々変容していると言ったな？」

「覚えています。不老不死の肉体、垢などの廃棄物が勝手に浄化される事に加えて、人の寿命が見える眼球。薬師さんと同じく、多腕に蠍の尾と鹿を模した角が顕現されたり……………」と手品師のびっくり箱みたいな身体をさめている事は聞きました」

「まだ話していない事もあると言ったな？」

「はい。薬師さんから受けた祝福が多く話の種が切れないとこの前仰っていましたか……………」

「俺は女でもある」

「……………は？」

ナターシヤの脳は破壊された。

「証拠を見せよう」

蚩尤はそう言うと、寝室に入り戸を閉めた。

直ぐさま歪な音が響き渡り、尋常ではない雰囲気部屋に立ち込める。それは骨を折り、肉を断っているかのように不快な音だ。

ナターシヤは先ほど食べたフレンチトーストの味などとうに忘れ、完全に放心してしまっていた。

5分が経ち、そろそろ音もおとなしくなってきた頃。

また戸が開かれた。

スラリとした長い脚が踏み出される。

ずいとお出てきたのは先ほどまでの蚩尤先生とは全くの別人、いや多少の面影はあるが、骨格から何から何まで変わってしまったていた。

まず身長の変化。蚩尤先生(♂)が179cmと中々の高身長であったが、蚩尤先生(♀)のそれは197cmと男であった蚩尤のそれを明らかに超えていた。

女性としては変化したせい、やはり胸元は膨らみを持っている。慎ましく存在して

おりそこまで存在を主張していない。だが、身長比から分かる通り、持たざる者よりも確実に持っている側であった。

切れ長の目はさらに鋭さを増し、鼻は高く端正な顔立ちをしており男性体の時よりも濃い異性を惹きつけるフェロモンを醸し出している。

そして、やはり一番惹きつけるのは黒曜の髪だろう。彼女の身長以上の長さをしており、2割ほど床に触れてしまっている。だが、彼女の体特有の体質故か汚れる様子は見えず光沢を保っている。

和を基調とした服装ならば真価を発揮するであろうその美貌と身体、何処と無く神秘性が増し、あの異形である姿をせずとも神聖視してしまいかけた。

「さっきぶりだな。ナターシャ」

ナターシャの脳は破壊された。(2回目)

鈴のように響きがいい声は確かにナターシャの頭に入ってきた。響きが良いすぎて頭を直接殴られた様に立ちくらみを起こしたが。

「大丈夫か？」

倒れかけたナターシャの身体を蚩尤は支える。

必然と顔が近づき、儂げな表情が迫る。反射的に身体が強張ってしまった。

「どう……説明付けければ良いのかしら……この感情を……」

恩師であり、思い人である蛭尤先生が女だった……その事実が与えたナターシャへの衝撃は凄まじく、動揺と困惑の嵐は激しかった。

「驚くことに無理はない。俺も薬師に男に変えられた時は心底驚いた」

ナターシャの脳は破壊された。(3回目)

キャパオーバーを起こし気を失いかけたが、優秀な彼女の脳はそれを未然に防いだ。だがそれも限界に近い。よく持った方だとも言える。

ギリギリ理性を働かせたナターシャは荒れ狂う情報群を咀嚼し、理解した。

『蛭尤先生の元となる肉体は女性だった』

『蛭尤先生は星神妻から男に変えられていた』

『妻……妻夫!?!』

「これで説明は付いたか？」

それ以上の事で、それどころではない。コートの持ち主を聞いただけで何故こんな事態になるのか……まるで分からなかった。確かに、女物であったこととサイズがだいぶ違うことについては説明された。現物で。しかし、譲り手が誰か皆目見当が付かない。蜘蛛をモチーフにした様な絵柄だったが……聞いた限りでは彼……彼女？の妻？夫？の趣味ではなさそうだ。

「ナターシャ？大丈夫か？先ほどから反応が薄いが…」

「え、ええ…大丈夫じゃないですが、大丈夫です」

「どつちなんだ？」

彼…いや彼女？の腕に抱かれながら微睡む。ついさつきまで寝ていたが、もう一眠りしたい程に疲れた…。

これ程短期的に疲れる日が来るとは思いもしなかった。

疲労の魔力が身体に宿ったのか、長くて大きい彼女の腕の中はとても心地が良く感じる。

ああ…眠い。だんだんと閉じられる視界の最後に、ナターシャは遂に意識を落とした。3回脳を破壊されて漸くである。

「寝てしまった…やはり、この姿を見せるのは疾かつただろうか？…後悔は先に立たずか、俺が選択した結果がコレだ。甘んじて受け入れよう。とにかく今はベッドに寝かせねば」

先ほどよりも高くなった視界を懐かしみつつ、ベッドにナターシャを丁寧に置いた。

起きた時にまた男になって混乱させるのも不味いだろう。今の事を夢だと思われて再度説明するのは面倒だからな。

暫くは女のまま生活するか。

「性転換をするとやはり体力を使うな。身体が怠くていかん」

こういう時は少し運動するのに限る。身体を500年ぶりに慣らすのも重要だしな。

「あの女から貰ったコートでも着るか、折角だし」

俺の髪の毛が長すぎて大事な蜘蛛のマークが隠れてしまうから、髪を纏めるのが大変だ。

そもそも切れば良い話なのだが、切ったところで直ぐ再生してしまうので意味はない。

化粧の心得も狐のお嬢や他の女友達から多少学んだ程度で焼け石に水状態だ。良い化粧道具は貰うものの、今のところこのコートの送り主に全部横流ししている様な状態だ。なので、化粧は特にしない。

すっぴんのまま外へ駆り出た。

蛭尤先生の妻がベロブルグに訪れていると町中で噂になった。

第8話

さあて、大変なことになったな。

精々見知らぬ女が出歩いていると噂になるくらいだと思っていたが：俺の妻にまで話が昇華するとは思ひもしなかった。

アホだな俺。

「俺の夫の認識を誤っていた：」

ナターシャ程薬師の事を話した人物もいなかったので話が飛躍したんだろう。

薬師が金髪だと他の子達にも言っておけば良かった：そうすれば間違った情報も多少は食い止められただろう。図体が俺よりもデカイという情報だけなぜ広まったのか：尻に敷かれるタイプだと揶揄されてその先入観が先走った結果か？

まあ、広まってしまったものは仕方ない。誤解を解くのは簡単とはいえ、一々性転換を見せるのも手間だし、見せてる間に噂が変な形で歪になりそうだ。余計な事をして副次的な惨事を増やすよりは、噂が広まり切るのを待ち、全く新しい噂に上書きする方が良いでしょう。

例えば、2週間後に俺が男の状態では既に帰った。と言えば、ベロブルグの人々は信じてくれるだろう。短命種の場合に合わせるのはまだ不慣れだが本当に2週間ほどで良いだろうか……まあ、その時になったら考えよう。

あれからナターシャは目覚めており、今もまだ俺の家で過ごしている。混乱は大分治つたようだが、少し俺との距離感を測りかねているようだ。無理もない。今はゆっくり彼女との対話をしていこう。

「蚩尤先生、一つ質問してもよろしいですか？」

「ああ、いいぞ」

「何故、私に女である事を隠していたのですか？」

「隠していたわけではない。単に言う必要がなかった。俺は性転換をせずこのベロブルグで滞在する気だった」

「…どうして、性転換をしないで過ごすつもりだったんですか？」

「これも薬師の所為だとも言えるべきか…俺と薬師は500年単位で雌雄を交代して過ごしている。これはアイツからの提案でどちらの姿の俺も愛したいと言っていた。だが、たった数年では愛が満たされない為500年の期限がついた。まあ、ここ1500年の間は薬師と別れていたの随分とアウトな基準なつて、長期間のスパンで入れ替わったり、短期間の間に何度も変わることもあった。まあ、要するに気分だ。この星

では、余計な混乱を齎さないというのもあつたが……まあ、それも君の質問から瓦解した」
「私を言い訳にされたら堪つたものじゃないですよ……神様との約束を破つて大丈夫なんですか？」

「心配ない。元々、俺と薬師が愛し合うために設けた期間に過ぎないし、今の俺と薬師は離れている。どの状態でいようが俺の勝手だろう。それに、再会する時にもう一度女に戻ればいいしな」

「……そうですか。薬師さんは何故蚩尤先生を男に？」

「さあな、そればかりは分からん。『愛』と一言に語つていた……恐らく、どんな姿の俺も愛したかつたのだろう。歪んだ愛情だ」

「それすらも貴女は許すんですね」

「……アイツの『伴侶』だからな。どんな歪んだ愛でも受け止め、愛するのが俺のやり方だ」
「因みに、『俺』という一人称は女の時からですか？」

「そうだな。5歳の時からずっとだ」

一通り話すとナターシャは額に手を当て、なにかを悩みながら考えているようだ。

俺はその間、ゆつくりと視線を外し、外の様子を眺めていた。

人通りは少なく、下層部らしいと言えば良いか……とろんとした時間が流れている。地下であるが故の暗さが時間の流れを錯覚させているのかもしれない。

秒針の刻む音を数えるのも億劫になる程時間が経った頃。

淹れたコーヒーの湯気は消え去り、唇に感じる熱さも気になくなった。

苦味と酸味、そして少量の甘味を交え小さな至福を味わっていると、唐突にナターシャの口が動いた。

「蚩尤先生、好きです」

……今か。

茶化す訳にもいかず、そつとコーヒーカーップを置き、ナターシャの目を見る。覚悟が決まった目だ。好ましいと感じる。

彼女が何故、どういった考えを持って今告白したのかは分からない。だが、その時が来たんだろう。

「驚かないんですね。こちらは谷に身投げする覚悟で言ったのに」

「十分、驚いているさ」

「そうは見えませんか。…どうせ、蚩尤先生のことですから、私の心を見たんでしよう？」

「見るといふよりも、読むと言ったほうが正しい」

「否定しないんですね」

「ここで偽ると君は納得しないだろう。君のその心に誠心誠意応えるのがこちらの筋

だ

「それで、お返事は？」

「駄目に決まっているだろう」

「…………ツ……！。…………なぜか、お話を聞いてもよろしいですか？」

「理由その一。俺は既に薬師と結婚している。理由その二。君と俺は教師と生徒だ。例え、君が卒業しようとも、それが事実だった事は変わらない。理由その三。君を置いて行きたくない」

「…………ツツ」

三つ目の理由が一番響いていそうだ。ナターシャ自身、それを一番分かっているだろう。

「分かっているはいたんです……。私は精々生きて80年。どう頑張ってもそれ以上の長きは出来ない……。私は貴女を置いて逝ってしまう。例え、私のこの気持ちを望む形で叶えられたとしても、貴女に深い傷を残してしまう。貴女は、優しい人だから」

悲痛な表情でそう言い淀むナターシャ。

追撃をかけるわけではないが……。いや、いずれにしろ酷な話だ。

もう一つの理由……。最も懸念している事を話そうと声をかけた。

「…………もう一つ理由があるが、聞きたいか？」

「…聞かせてください」

「君の存在が薬師にバレれば、薬師は君を試すだろう。果たして自分の伴侶に相応しい存在かどうか。…その過程で君は長命種になる。試練の時間は人の身で終わらない。勿論、その間に君の知人や友人は皆寿命を迎える。代償として…もしクリアすれば、向こう数千年は俺と一緒に過ごせるようになるだろうな。だが…魔陰の身は少なからず君を襲う」

「魔陰の身?」

「長命種の成れの果てとでも言うべきか…単に言ってしまうえば、理性のない破壊を繰り返す化け物になる。…過去の事は全て忘れる。例え自分の親だろうが、夫だろうが、親友だろうが…本当に全てだ。抑え込む方法はあるが、堪え難い苦しみ君を襲うだろう。もし、君が耐えられなくなった時…その時、誰が君を止める?…俺だ。君をそんな運命に狂わせてしまった俺の責務だろう。…これは、悪い女…いや男の我儘だ。己がそんな別れをしたくないというな」

「……………そう、ですか。ありがとうございます」

「感謝を言われる筋合いはないだろう。君は俺に罵詈雑言をぶつけても良いんだ。どれだけ激しく罵られたって受け入れよう」

「素直に言ってくれましたから…」

「……すまない」

「ですが、それなら私の我儘を聞いてください。これは…罪深い女のどうしようもない最低な我儘です」

ナターシャは先程とは打って変わって、酷く辛いような表情で何かを言おうとしている。だが、先に最低な自分の我儘を通したのは俺だ。どんな我儘でも聞こう。そして、応えよう。

「…お願ひします蚩尤先生。この星に居る間だけでいいですから…つ。貴女の側に居させてください…つ。ただ…それだけでいいんです…」

「……………分かった」

彼女の我儘は先程言った、三つ目の理由と等しいが…その傷は受け入れよう。最初
に彼女に大きな傷を残したのは俺なのだから。

「ありがとう、ごさいます。…ごめんなさい」

そう言い終わると、少しずつ涙を滲ませ、声を漏らしていった。あまり見なかった…
彼女の弱った姿だ。

読心を使うのは無粋だろう。暗い感情は本能的に隠したが己の痴情だ。

…だが、寄り添うことぐらひは許されるだろう。女体の身ではあるが、彼女を抱き締め頭を愛でた。

きつと、それが、少しでも彼女に対しての贖罪になるから。

「本当に、母みたいでした」

「まあ、お婆ちゃんと言われるくらい長く生きたしな、風格はあるだろう?」

「それ以前に、撫でるのが上手いですよ…五万年の間に何度人を撫でたんですか?」

「数え切れないくらいにはやったな」

「あら、全ての記憶を覚えてるんじゃないやなかつたんですか?」

「思い出すまでに時間がかかるんだよ。いちいち人を撫でた感触を思い出すのは疲れ
るぞ。何しろ5万年分だからな」

「ふふつ、そうですか」

ひとしきり抱き締め合つて、暫くの時間が流れた頃、ナターシャは何時ものような対
応に戻つて、落ち着いたようだ。

「一応、理由には出さなかつたが…君もどんな姿でも愛すタイプか?」

「はい。勿論です。貴女の妻になるつもりでしたから」

「そうか……なら、少し協力してくれないか？君の眠ってる間に、とある噂が広まってしまうた」

「？……うわさ？」

ナターシャが眠っている間に外を出歩き、蜚尤の妻がペロブルグに訪れていると言う噂が広まっていることを伝えると、ナターシャは「何やってんですか」と呆れた視線を向けながらこちらを見ている。

「はあ……何故女性の姿で出かけようとしたんですか？」

「性転換をすると倦怠感が酷くてな。多少の運動をして気を紛らわそうとした」

「……ペロブルグでは見慣れない女性で通常とは逸脱した容貌の持ち主に紐付ける最近の人物といえば？」

「俺だな……」

「長生きしているのに、自分に関する評価が低いんですね貴女は。いえ長生きしているからでしょうか？」

「……すまない」

「取り敢えず、私が合わせますから、暫くの間は切り替えながら過ごして下さい」

「ありがとう……今度は俺が泣きついてもいいか？」

「何いつてるんですかお婆ちゃん……それに私は蜚尤先生の頭を物理的に撫でられませ

ん」

「それもそうだな。忘れてくれ。…取り敢えず今は男の状態になって、皆が思ってる疑問に終止符を打つてくるとしよう」

「分かっているとは思いますが…」

「ああ、神を騙るのは恐れ多いが、ちゃんと俺の妻だと言うことにしておく」

「それじゃあ、いつてらっしゃい。蛭尤」

先生とは付けなくなつたんだな…ちよつと寂しいが、彼女との関係性がより親密になつたのを感じる。悪い気分ではない。

「ああ、行つてくるよ。ナターシャ」

着替えを取るついでに、性転換を行つてから外へと駆り出た。

「ナタと呼んでくれても良いのに…」

外へ出ると自然と視線が集まるのを感じる。噂が広まっている証拠だろう。

ちらほらと、『蛭尤先生の嫁』というワードが其処彼処で聞こえてくる。

ペロブルグが小さい都市である事はこの二年で知っているつもりだったが、まだ浅い認識だったらしい。

この様子だと城内にいるグレーシヤにも噂が届くのも時間の問題だろう。

この世界を束ねる唯一の最高権力者が外からやってきた者をそのままのさばらせておくのは如何なものか。あと一日か二日、それか今日中にでも事情を説明するよう『2人で来い』と要求されるだろう。

本当の事情を知った時、グレーシヤはどんな顔を……とその前にカカリアとも出会うかもしれない。

あと一ヶ月もすればグレーシヤは引退し……カカリアが台頭してこの世界を治めるだろう。

あの時の彼女の誓いは嘘ではなかったと……その活躍を楽しみにしている。

まあそれはそうと、皆が思っている噂に終止符を打たねばならない。

本人からの証言がこの手の噂に限っては良く効くだろう。

丁度良い具合に人が群がっているので、その機会を存分に使わせてもらおう。

「お！誰かと思えば蚩尤先生じゃないか！丁度アンタの嫁さんについて噂してた所だよー！」

「ああ、俺も聞き及んでいる」

「ベロブルグで全く知らない女性がいて、みんな誰だろうって言い合ってたんだ。えらく別嬪さんだもんで、一度見かけたら忘れないくらいだったから、きつと蚩尤先生

の嫁さんに違いないって若い子が言い出して……」

「それは事実だ。俺の妻ならベロブルグに来ているぞ」

キヤー！やっぱりそうだったんだ！早くみんなに知らせなきゃ！

道理であんな美人さんなわけだ。

私ちよつとだけ見かけたんだけど、本当に背が高かったわ。

宇宙の技術つてすげえなそんな簡単に星の間を旅行できるのか。

蚩尤先生よりも長生きなんだろ？一体どんな人なんだ？

「その辺をほつつき歩いてるようだから、好きに声をかけてくれて構わない。2週間はいるそうだ」

納得したのか噂の事実を知るやいなや解散し他の者に噂の真偽を教える者や、未だに俺の妻についてどんな人だったかを話す人々と大きく二分化された。

俺もいくつか質問され、どうして妻が来たのか。どうやって来たのか。どんな人なのか。など、様々な質問をされ、俺は一つずつ丁寧に答えていった。勿論、嘘も交えている。その答えに満足した者、満足せず質問を続ける者など長い時間が過ぎた。

やがてその人集りも消え、恐らく噂は情報となり広がった事だろう。俺もこれから性転換を切り替えながら過ごして行かなくてはいけない大変な日々を送る。まあ、完全に自分の失態なので甘んじて受け入れよう。

目標も達成した事だし、あとは勝手に広がるだろう。
ナターシャの元へと帰るか。

第9話

「提案なんです、女性体の時の一人称を『私』など他の一人称に変えた方が良いと思います。ベロブルグの殆ど全員に嘘を吐く形になるんですし、少しでもバレる可能性は減った方が良いでしょう」

「ふむ…ならば本来の薬師に倣って『吾』か？」

「まあ、一応他の人々にも蛭尤先生よりも年上だという事は広まっているようですし、アリですね。一般の人にはまだ違和感があると思いますが…許容範囲内です」

「それ相応に口調も超然とした風にしなければならぬか…あの剣士みたいだな…」

「剣士？」

「1200年ほど前に手合わせ…というの俺の感覚か。アイツからしてみれば殺し合いだったのだろう」

出会い頭、氷柱が心臓に突き刺さったのは本当に驚いたな。

驚いたただけだ。

「それはまた…物騒な話ですね」

「薬師の没滅は仙舟の民の悲願だからな……薬師の居場所を常に知る俺は仙舟の民にとつて一番の近道、あちらからすれば豊穡の忌み物である事に変わりはないし、会つて早々に戦闘になる事は何も可笑しくはない。仙舟の人々と豊穡はそれ程長く戦つてきた。……早く解放されたいのだろう。だが、こちらとしても俺を愛してくれた伴侶の殺害だ。当然反抗する」

「それ程の確執がありながら、講談の中では随分と仲が良さそうでしたな?」

「色々あつたからな………本当に色々」

仲良くするまでの軌跡は透明な時間と称して正しいか?……涼んでいたら勝手に横に寄つてきた猫とか……。殺伐としていた空気も長い時間を得た中で無くなつていった。まあ、それが仙舟から狙われなくなる理由ではないが………休戦つといった感覚に近いだらう。

「まあ、個人的な一人戦争だつたから300年ほどで終わつたな。決着は嵐が降臨したのが原因だ。後ついでに何故か降臨したアツハ。久しく生命の危機を感じ取つたというか……存在消滅の予知をしたが、俺は奴らの力の半分を消耗させ撤退に成功した。アレは奇跡に等しかつたな」

苦虫を噛み潰した顔をしているのが自分でもわかる。アツハと仮面の愚者たちが参加してきたのは本当に謎だつた………まあ、謎だから愉悦足り得るのだろう。そして意味不

明だからこそその愉悦。星神のアツハは俺たちを平面として閲覧する何者かの娯楽の為のみ行動する…愉悦の意思に指向性はなく、湧き出た悦楽が大小際限なく巻き起こる。…奴に干渉された力がピクピクと動いているのがわかる。…『アツハ』…いても居なくても困った奴だ。

「……待つてください。さらつと、2柱の星神を下していませんか？」

「下してなどいないさ。アレは…もつと悍ましい結末だった」

俺自身、何が起こったのか覚えていない。気づけば去っていく嵐と、嗤い続けて消えていったアツハの光景しか見ていない。だが、その時に理解した。『あらゆる存在を拒絶する何か』が起きたのだと。…俺自身も含まれていたのか…それは分からなかったが、何者かの介入があつたのは確かだ。星の神よりも強大な…何か…。

「……そうですか。これ以上は詮索しません、結局、口調や一人称をどの様に変えるつもりですか？」

「まあ、今言った剣士スタイルで……あ、駄目だ。もし弟子に師匠を真似てみたなどバレれば絶対厄介な事になる。それはゴメンだ」

「じゃあ、薬師さんの口調で話しますか？」

「いや……それも厳しいな。天才クラブや博識学会の者なら理解は容易いが、ペロブルグで彼奴の言葉一つ一つの言い回しは理解されにくいだろう。俺も模倣できるとは

いえ演るのは面倒だ。精々参考人程度つといた具合か……」

「では、概ね人物像が決まったと言う事ですね。後は実行するだけです」

「簡単に言ってくれるな……」

「5万年も生きていれば色々な経験をしていると思つてますので」

「まあ、そうだな……今まで怪盗染みた真似をやったこともあつたしな……他人になりすます事なら得意だ。マジックが得意な青年ともみあげの濃いコミカルな男に教わつた。多用はしていないが事あるごとに便利だな」

「蚩尤先生が怪盗……ですか？意外ですね……」

「幻滅したか？」

「いえ、幻滅よりも先に意外性が来ましたね。……まあ蚩尤先生の事ですから何か理由があるんでしょう？」

「とある少年からの契約で一時的に星核ハンターという組織に属していた……まあ、その時に払つた代価とでも言つておこう。詳しくは言えない。契約の一部にあるからな」

「……星核ハンターとは？」

「君が知るべきことではない。ただ……あのコートを送つた張本人も一緒に所属している。とだけ言つておこう。……恐怖を知らぬ強き子の代価履行は近づいて……ん……いや、今の言葉は気にしなくていい」

「……時々、蚩尤先生は自分でも不理解な事を話しますね」

「星神に干渉されたからか、時折虚数エネルギーが見せる幻覚があるんだ。それは既知の未来か未知の過去か：分からないが、偶に存在が曖昧になった感覚がある。おそろく、ソレのせいだろう」

だが、時空を司る虚数エネルギーなぞ：『終焉』のテルミヌスだけだった筈だが：アツハが何かに干渉したか？いや、星神が星神に干渉し得るか？：駄目だ。アツハだしなあ：：が最終結論として出てしまう。

「また私の知らない単語が出てきました：。虚数エネルギーとは何ですか？」

「虚数エネルギーとは言つてしまえば、運命を操作するエネルギーだ。その運命に属した事なら大抵のことは出来る。豊穰の運命なら人や物への治癒が虚数エネルギーで出来る、壊滅なら破壊の虚数エネルギーが生み出され、物体や概念の破壊も可能といった具合にな。知覚できないが故に『虚数』と名付けられている。案外何処にでもあるものだが、使える者はかなり少ない。俺の幻覚はその中でも一番意味不明な虚数エネルギー『愉悦』だ。極少量の筈なんだが：流石は星神と言うべきか：影響力が強い。今度、薬師に再会したら本格的に診てもらおうと思つている。因みに星神は全宇宙に存在する虚数エネルギーを自らの《運命》に対してのみほぼ完全に掌握をしている。故に、ソレ以外の行動が出来ないらしいが：俺と薬師の関係はその根底を揺るがす物で、一度学

会が荒れた。一人の存在に星神が釘付けになるなどあり得ないからだ。俺自身、全く分からんし、そうなるからそう。としか言えないが…学者たちは納得できなかった様だ…ヘルタに120時間問答され続けるのは疲れたな。何せ、俺が覚えているのは、溺れる様な快樂と口内の蹂躪劇で…メエイとスクリューガムが止めてくれなかつたらどれ程…そういえばなんか3人ともその時様子が可笑しかったな」

「真面目な事を聞いているのに急に男女の睦言を事細かく言われれば誰だつて怒りますよ…」

「そうか？あの3人は星神の生殖ともなれば逆に事細かに知りたがっていたぞ？少し話すのが恥ずかしかったが、星神との行為は神秘である事に変わりはないからな、俺も薬師の蜜の味など詳しく解説して…あれ、でも最後の方はなんか変だったな…」

「……3人とも破壊されたのね」

「何がだ？」

「脳が」

「脳が？…いや電子回路？そういうえばスクリューガムの光センサーが可笑しな挙動を…」

「今更ですが、学者の知り合いも多いんですね…蛭尤先生は」

「一応、学者もやっていたからな…3万年程前に。まあ、最近復帰した事もあったが、

またすぐに辞めてしまった。：尤も、俺が学者をやる機会よりも実験台にされる機会の方が圧倒的に多かつたな」

「ちよつと、どう反応していいか分からないブラックジョークやめてくれませんか。：因みにそれって、かなり肉体の損傷を伴うものですか？」

「そういうのもあつたが、それは壊滅寄りの派閥に属していた時だな。もつとマイルドな物もあつたぞ。試薬の治験とかな」

「それも私は嫌ですが：というかそれって毒だつたりしませんよね」

「どうして分かつたんだ？」

「蛭尤先生の日頃の行いです」

「そんなに悪いつもりはないんだがなあ：言つてもいない事を暴かれる程とは：」

「因みに、学者の方々とはどう言つた関係ですか？」

「俺は実験動物である事が一番多かつたな。議論を交わす事もあつたが、満足してもらえる回答を与えることは少なかった。だがまあ、少なくとも、彼、彼女らの友人としては扱われているんじゃないか：？」

「何でそこで疑問形なんですか」

「天才クラブも博識学会も一定を除いて人格破綻者ばかりだからな。俺が友人だと思つていても彼らは友人と思つていないかもしれない」

「……学者に普通の人は居ないんですね」

「居るには居るんだぞ？ 圧倒的に破綻者が多いだけで」

「なんのフォロワーですか……」

「スクリーンガムを含めた比較的まともな天才達の風評被害だ」

「そうですか……」

第10話 酸いも甘いも噛み分けて今

蚩尤先生の妻が訪れた。

その噂は瞬く間にベロブルグ全土に広がり、建創者の耳にも届いた。

蚩尤があらゆる場所で講演を行った結果である。蚩尤は今となつてはただの客人ではない。ベロブルグでかなりの人気を誇る講演者だ。

グレーシヤは直ぐに蚩尤を呼び出し事態を把握、蚩尤と偽の蚩尤の妻が同一個体と知るや否や盛大な溜息を吐いた後に上手く誤魔化すよう告げた。

因みに、カカリアにはこれを知らされていない。

「やはり吾が引き起こした騒ぎは些事に過ぎないか……グレーシヤには感謝せねばな」城内に招待され、陽の吾が居なかつたグレーシヤの困惑顔は少し滑稽であつた。事を知つたとて彼女にできる事は少ない故に最良の判断と言えるだろう。

無断入国の疑いもあつたが、事が事だけに不問にしてくれたのも有難い。

本意で吾の妻が来すならば、事前に報せを送るのは絶対であろう。豊穰の厄がこのベロブルグに訪れるのだから。

「あら、薬師さん。もう帰ったんですね」

「ナタか。未だ吾の家に居るとは…暇なものだな」

「ちゃんと両親の許可は取っていますから。それに、私たち共犯でしょう?」

「偽りを貫き通すという事のみにな」

「……私の前だけでも口調を戻しても良いんですよ?」

「為らん。時の偶然は誰にも読めぬのが理。傲慢を持つべきでない」

「本当に、理解し辛い話し方になりましたね…」

「これでも柔らかい部類だ。本物はより理解し難い…いや、吾の演技が下手なのか?」

「大丈夫ですよ。相当雰囲気も変わっていますから。蚩尤先生と繋げる人はそんなに

居ないと思います」

「そうか…」

「それより、夕食にしましょう。お腹減っているでしょう?」

「そうだな。階段ばかりの道で腹も空いた」

吾が再び作ろうとしたのだが、ナタが作ると言い張り譲らなかつた故に、素直に待つ

事にした。

朝は吾が作ったからだろうか…好意を無下にする事は愚かな事だ。有難く譲り受けるのが礼儀というものだろう。

リンクスから薦められた雪国冒険奇譚という書物を読んで待つとしよう。

…しかし、周りから聞き及んでいるものとは少々乖離しているように感じる…。

もしやこれは同人誌と呼ばれるものでは…？それにこの筆跡…ペラ・セルゲーブナと全く同じものでは…？

読みふけること30分ばかり…。

「薬師さん、ご飯の支度が終わりましたよ。…何を読んでいらしたんですか？」

「雪国冒険奇譚という書物だ。中等部のリンクスから薦められた本でな。中々良くできている」

「私も知っています。人気ですからね。そのシリーズは」

「だが、学校の子らが話している内容とは少々の乖離を感じる。筆跡も吾の生徒と似通っている為、これは原作ではなく二次創作の部類だと思っっているのだが…それにしても良くできている。将来は小説家だろうか…いや、彼女は進路面接の記録では軍部の情報官志望だと聞いたのだが…」

「あまり人の進路を言いふらす物ではありませんよ。薬師さん。今のは聞かなかつた事にしますから、食事にしましょう」

「吾が軽率であった。すまぬ。…今日は何だ？」

「朝は薬師さんが砂糖という貴重な物を使用されていたので、私もお返しにベロブルグソーセージを用意しました」

「ほう、入手が困難な上に高価なものだった筈だが…？」

「ええ、奮発しちゃいました」

「そうか…ならば有難く頂くとしよう」

ナタの作ってくれた料理は美味であった。

こうして人から料理を恵まれる機会が多い、最近ではスクリユーガムからのミルワグステーキが記憶されており、それに負けず劣らずの味だ。中々、上位に組み込む味ではなからうか。因みに、最下位は薬師である。彼奴の料理は正にダークマター。不味いというわけではない、味の情報量が多過ぎて気絶するのだ。星の切片と聖歌の旋律を夜の雫と一緒に料理したと言っていたが…その素材は全く聞き及んだこともないものだった。恐らくアレは神の嗜好品であって、人が食べるものではない。最悪死ぬ。

「ナタの料理は美味であるな」

「そうですか？お口にあったようで良かったです」

「医者のお勉強に加え、これ程の料理スキル…習得するには苦勞したことだろう」

「ふふ、そんな大変でもありませんでしたよ。母の手伝いは日頃からやっています」

し、自炊の方が食事支度は多かったですから。自然に…です」

「そうか…では将来は子に好かれる母になるだろうな」

「…：…：そうでしょうか。案外口うるさく叱りつけてばかりで、嫌われているかもしれない」

「問題ない。ナタの愛はしつかり子に伝わる」

「なんでそう言い切れるんですか？」

「5万年積み上げてきた人の観察術の賜物だ」

「なるほど…：…：蚩尤先生は酸いも甘いも噛み分けて来ましたからね…：納得です」

「人の醜悪さと美麗さはよく知っている」

人の美醜

その話で思い出すのはとある剣奴だ。この話は48000年前まで遡る。まだ陰陽が弄られず女として育っていた時だ。

アズリア・ルカ・ヴァルバリア。真紅の長髪がよく似合う女だった。

美しい容姿と比例して勇ましき…：…：というか反抗心が強かったのを記憶している。

吾が見かけるたびに、自分の主人に食ってかかり、何十人もの屈強な男達に鎖で抑えられていた。

何故あんな細身の身にあれ程の筋肉が収まっているのか全くわからない程の超怪力を誇っており、恐らく吾が出会ってきた人間の中で素手ならば最強の人類だ。まず初速が見えなかった。…今はどうだろうな。多分、見えないな。

アズリアは吾もただ眺めるだけの存在…いずれ薬師が本格的に動き出す時に救われるだろうと漠然と考えていた。

しかしまあ、何の因果あつてか、吾とアズリアは友となつてしまった。

始まりは…そう。アズリアが吾に話しかけてきたことだ。

『お前、見ない顔だよな。どっか他の惑星から来たのか?』
突然の事で少し言葉に詰まった。

吾は何かと目につくアズリアをただ眺めていただけだ。何故話しかけられたのか最初は理解出来なかった。

彼女に理由を聞いてみれば。

『信じられねえぐらいたいえ女が居たもんだからよ』

と、吾の身長が物珍しく映つたのが原因だと語つた。当時、アズリアの身長は172 cm。吾は197 cm。そして、その世界の女性の平均身長は155 cm。…お互い、異端だった。因みに、アズリアはまだ成長途中であり、ここから更に11 cm伸びる。

兎も角、吾とアズリアはその会話がきっかけで十数年の友となり得た。

アズリアは：奴隸という身でありながら珍しく捻くれずに育っていた。

嘘は嫌いだと断じて、意見を真つ直ぐに言う。事象の解決方法が大体暴力的なのは然もありなん。

話していて気が楽になる奴だった。薬師とはまた違う意味で。

時折、奴隸の牢から月見がてら酒を煽るのが当時の趣味であり、楽しみであった。

いつのまにか、人の身である奴を好くのは当然の帰結だった。

奴は負けた事のない強者だった。：当然だ。劍奴の負けとは死を意味する。幼い頃から劍奴として育った奴は無双の奴隸として名を馳せていた。

だが、人と離れた強さを持つていても奴は人で在った。一人の人間として、恋をして、奴隸という壁をぶち壊し結婚まで漕ぎ着けた女傑だ。

奴隸から逸脱し、旦那を守りながら逃げて：逃げて：逃げて：平和を手にした。

もう死を覚悟しながら戦う必要はない。貴族である主人に従う必要もない。彼女は自由になった。

彼女が逃げたという報せはすぐに話題となった。

彼女は人気の奴隸だったからだ。

彼女が逃げたと聞いた時、吾はとある会話を思い出した。

『旦那と静かに暮らしたい。子供も出来るなら欲しい：もう出来ねえ体になつちまっ

たけど』

これはある晩を境に友となった日に聞いたアズリアの本音だった。

彼女は子を成せなかった。奴隷になつてすぐの頃に、貴族に不敬を買い、そういう体になされた。と。

なんでも、貴族の性欲の処理に抗つた結果らしい。

本人は、それでも子供は欲しいと、誰かを愛して普通の女の人生を送りたいと寂しうに言っていた。

最初は、その会話を聞いてすぐに治そうとしたんだが…。

『アタシは一度も迎えたことあ、ないけどよ。女の子の日って奴?…なんか、色々ツレエんだろ?なら、今はいいよ。不調で本気出せませんでした、は笑い話にもならねえからな。それに、アタシが眠つてる時にあのクソ野郎、襲つてきた時もあったからな…眠つてる間にアイツの子種が腹ん中でウヨウヨしてると思うと吐き気がする。…まあだから、アタシが自由になつた時にやってくれ。後は頑張つて男を見つける!』

今が正にその時という訳だ。

吾は、友の願いを叶える為に彼女の元へ訪れた。

吾がアズリアを見かけた時、明らかにこれ以上ない惚気顔だった事を記憶している…

別人かと思うぐらいだった。

逆に、吾の存在に気づいたアズリアは心底驚いていたな。

『約束を果たしにきた』

『ハハツ：マ、マジかよ。まだ覚えててくれたのか？』

『言つたろう？俺は絶対に約束を違えることはない』

『最高のダチだぜ：：お前』

女同士の絆というよりか：：吾らの絆は若干、男寄りだった。

治癒は割とあっさりと終わった。豊穡の運命に傾き、薬師の一端を操る吾にとって、不妊の原因となる傷害の治癒は易い事だった。

：：本人にとっては、これ以上ない至福だったのだろうが。

サーブスで今まで闘技中につけられた傷も全て直したのだが、余計な事だったらしい。

最初は夫から嫌と言われるんじゃないかと思って早く治したいと思つていたそうだが、夫が今まで頑張った証として、傷も愛すと言つてくれたのが嬉しかったらしく、傷は永遠に治さないと誓つていたらしい。結局、どっちの君も好きと言われた瞬間惚気おつたが。：：：阿呆らし。

傷を直した後も何年か彼女の家へと通った。

徐々に増える家具、段々と膨らむ命の運び、表情のバラエティーが増えていくアズリア。
アズリアは確かに幸せを手にしていて。好きな男と手に出来なかつた筈の子供に2人も恵まれ、奴隷の時代ではあり得なかつた笑みを浮かべて過ごすようになっていた。

だが、今まで殺生によつて生き残つた彼女の迎える最期は凄惨だつた。

何処から嗅ぎつけたのか民衆と屈強な戦士20人を引き連れた元主人である貴族に、夫と子供を殺されていた。本人も首だけの存在へとなつていた。抵抗はしたのである。彼女の平和の象徴だつた家の周辺……そして中には夥しい血痕と彼女が千切つたであろう曲者の四肢や内臓がそこらに転がっていた。

長年の奴隷闘士としての戦闘の勤も忘れ、ただ一人の母として自覚を持つた直後の事件だつた。

子供と夫の亡骸を見て、女々しく泣く姿は……語るべきではない。

吾が訪れた時……いや瞬間か、最後に聞いたのは悲鳴でもなく、絶叫でもなかつた。彼女の啜り泣きだつた。

アズリアの元所有者であつた貴族は、首だけになつたアズリアにキスしていたのを思

い出した。

やめろ、と酷くか細い声を出したのを覚えている。…彼女にそれをしていいのは彼女の旦那だけだ。

民衆は……彼女の身体を貪っていた。己の欲を全て殴りつける用に……彼女の死体に向かつて何人も、何度も。

アレは……とち狂つてるとしか思えなかった。貴族が何かの力を働かせて民衆の心理を操っているのだと……思いたかった。

彼女は人気だったからな……。

奴隷の身でも廃れずに在り続けた家族の愛。

人間のどこまでも悍ましい執着心と所有欲。

倫理を無くした獣の様に悦樂を貪る人間共。

……人間は正に混沌だ。

まだ2000歳の若かった当時の話。これ以降ならば、より酷い話や似たような話なら方にある。だが、最初に出会った人間の業はこれだった。そして、あれほど感情を揺さぶられたのも……。二度と、味わいたくないが……人は可能性の塊だ。あり得ないはあり得ない。おそらく、また訪れるのだろう。……今までもそうだった様に。

この話の後釜として、吾がアズリアの仇を討った。何もかも遅れていた吾のつけた

精々ものケジメだった。民衆には廃人へとなる種を脳に、貴族と20人の雇われた戦士には永遠なる豊穡厄災の快樂苦痛を魂に。

薬師に頼みアズリアと夫、そしてその子供達を極楽へ送り届けられるよう少々、運命を操作した。魂の感知は当時の吾には出来なかつた所業、薬師に頼るしかなかつた。蘇生もまだ可能であつたが……もう、彼女を現世に縛り付けておくのは地獄だと思つたら、やめた。

人間の満たされていない欲求を満たし、同じような過ちをしないよう。その世界には『豊穡の雫』を垂らし、去つていったが。

…果たして今はどの様な『試練』を迎えているのか、分からない。…もう48000年前の事だ。

豪勢な食事を食べ終え、食器を片付ける。

朝はナタがしてくれたのだ。今度は吾の出番だろう。

ナタから『そんな、自分がやります』と言つてきたが、朝はナタがやったのだ。夜ぐらい吾がやるべきだろう。

元々、ナタは客人なのだ。

「薬師さん」

「なんだ」

「薬師さんの趣味ってなんですか？」

カチャリと食器を乾燥籠に入れたところで、趣味を問われた。

「趣味だと？」

「そういえば、まともに聞いていなかったな。と思ひまして」

これは…おそらく蚩尤としてだろう。薬師の趣味は無いからな。精々あつたとしても、世界に豊穰をもたらすことだろう。…：…それか吾との逢瀬か。

「吾の趣味か…：…。趣味と言えぬのなら幾らでもあるな。随分長い事暇を持て余してきた。吾として石ではない。あらゆる遊戯に手を出してきた。ナタはどうだ？」

「私は…：…そうですね。強いて言えば、人形を作ることが趣味でしょうか」

「ほう、人形作りか。料理に加えて中々多彩な…：…して、何故人形作りを？」

「元々は外科手術で行う縫合の練習にしていたんです。可愛いものが好きというのもありますが、時々、小さな親戚の子が私に人形の修理を頼んでくるんです。…：感謝の言葉を貰っているうちに、いつのまにか趣味になりました」

「左様か。…：とても暖かい理由だな。その趣味は大切にするといい」

「ええ、勿論です」

「今度は吾が説明する番か：そうだな。最近であれば、電子盤の遊戯だな。一般にゲームと呼ばれるもので、様々なものがある。正直、具体的にどうこうというのは不可能だ。ゲームも既に星の教程ある故、説明が難しい」

「ゲーム：ですか。時間があればやってみたいですね」

「ゲームにもじっくりやるものと気軽にやる物で種類がある。ナタの好みでやると良いだろう」

「もし、私がゲームをやる機会があれば、教えてくれますか？」

「勿論だ」

「他に何かあるような言い方でしたけど：何かありますか？」

「ふむ：全てを羅列するとなると：6時間程は必要になるな。なにせ他の星の異文化も混ざるのでな。：一つ明かすとなれば、夢を見ることが趣味だな」

「夢を見る事：それは趣味に：なるんでしょうか？」

「愉しめればそれで趣味になる：愉悦の子らと同じ様な理由で癪だが：夢はなんでもいいのだ。良い夢も悪夢も夢は夢。空想を楽しむのが夢を趣味に昇華させる基本だ。まあ：調和の子らは、良い夢：それも押し付けがましいが、確かな愉しみを人に送っているからな：今は不問にしている」

「?何のことを言ってるんですか?」

「いや、すまない。話し過ぎた。兎に角、吾の暇潰しはあらゆる事象だ。散歩する事も読書する事も音楽を楽しむ事も…作る事さえな。一般に趣味として扱われている物に加え、趣味とは言えない趣味も持っている。今言った夢見もそうだ」

「私はそんなに時間を使える自信がありませんが…少しずつ覚えて行こうかと思いません」

「ああ…それでいい。少しずつナタに教えていこう」

食器を洗い終えた後は、また別の話題で雑談し、周りの建物からも明かりが消えて行く事に気付いた所で就寝した。

第11話 閑話

案外、呆気ない2週間だったと伝えておこう。

セーバルにこそ、その微妙な違いを感じ取られ、『アンタ、蚩尤先生でしょ?』とバレた時は焦りを覚えたが。

思いの外騒ぐ事もない結果に落ち着いた。流石はランドウ一家一の才女と言うべきか。骨格から声まで何から何まで違つたと言うのに。本当に何に勘付いたのやら…。

セーバルとは定期的に作曲と一緒に手伝う仲となつた。ヨシツ!とガツツポーズしていたのが気になるが…まさか同じ轍を踏んでは居ないよな?…まあ、作曲自体は趣味にしていた時期もあつた為にそこまで苦ではない。因みに試作で作つた曲のタイトルは『凍滅理火土』である。俺の趣味が結構入つた曲だ。セーバルには好評だつたぞ。

特に『熱くなれ! 世界に凍るな! ! 自分だけの道を切り拓け!!』という歌詞の部分が気に入つた様だ。ロック調にしてジャカジャカ鳴らしただけだつたが…あそこまで受けるとは思つていなかった。

他にバレた者も居らず、俺の女体化の秘密——正確には元に戻るだけなので女体化と

は言い難い——を知るのはセーバルとナターシャだけだ。

因みに、ナタ呼びからナターシャ呼びに戻った時に少しだけ残念そうにしていたので、仕方なく今もナタ呼びを続けている。ナタと男の姿で呼ぶと分かりやすく機嫌が良くなるので可愛いと思う。まあ、残念なことにこの可愛いという感情は孫の可愛いと似たようなものなんだが：ナタに知らせたら抓ってくることは間違いないだろう。経験則から分かる。

あれから日常が劇的に変化したかと問われればそうでもないと答える。

リンクスから『私を外に連れ出して』と何処ぞの守護者と同じ様な事を言われ、その願いを叶えた程度か。

最近の子はあそこまでサバイバルに詳しいとは恐れ入った。

後にバレーで、セーバルとジエパードからは小言を2時間程言われたが、案外短かったな。少なくともグレーシャよりは…。

他に何かやり出したことと言えば：定期的なマッサージ屋だろうか。客は3人だけだ。

豊穡の身である故、そう言った回復効果を施すものは得意だ。疲労の完全回復は勿論、免疫も高め、しみ、そばかす、たるみ、しわ、ニキビという肌に関してのケアも行ってきている。因みに客といっても知り合いばかりで、ナタとセーバルとカカリアのみで

ある。

女性が肌について煩いというのは生まれてから1000年経って理解していたからな：心情まで理解するにはさらに500年かかったが：その甲斐あって、良好なコミュニケーションを築けた事は何度かある。

若々しくなったセーバルやナタの異変に気付き、最近では学園の女学生達も俺のマッサージを受けたいと願っているようだが。此方は講演の関係で時間が重なり、やった事はまだ無い。

鼻屑するわけにもいかないので、いずれ空き時間が出来たら優先的に依頼を受けようと思っっている。

薬師（偽）訪問事件も過ぎ去り、1年が経過した。

ベロブルグの生活にも慣れ、安定した日々が続いている。

ナタとは同棲生活のままだが、偶に実家に帰っては親に近況報告をしているらしい。だが、そろそろ別れの時だ。彼女はベロブルグのベネポレンス病院に入り臨床実習に取り掛かる。流石に下層部からの通勤は難しい。彼女の医師免許が掛かっているため、少しでも環境は良くした方が良さだろう。

セーバルのバンドに誘われたりしたが、断った。700年前最近、バンドに加入したばかりだっ

たからな。あまり未練も無かった為、今は作曲活動に専念している。あと、セーバルは無事に軍の연구원となり、星核について研究を始めたようだ。

カカリアは無事に式典も終え、正式な大守護者となった。口調も雰囲気もガラリと変わっており、国：はたまたこの世界の人類を率いる者としての良い顔をしていた。少し：危なげなく思ったのは：背後に聞こえるあの声が原因だろうか？

リンクスには特別、外の世界の話を多く語り、いつしか外へ連れ出す事を約束した。彼女がほんとは？と吃驚した表情で此方を見ているのは可愛らしかった。無論、約束を違える事はない。

ペラは最年少の情報官となり、既にその能力を存分に発揮しているようだ。因みに、そんな敏腕な所を発揮しつつ、執筆活動もちゃんと続けているらしい。彼女の雪国冒険譚の二次創作物がリンクスから私に伝わり、俺が読み終わってから2人で品評会をしているとは流石のペラも思うまい。いつしか、長々と感想を書いた原稿をペラに見せるのが楽しみだな。

ジェパードは無事兵士となった。だが彼の事だ。すぐに戍衛官候補という肩書き通り、皆を存護する盾となるだろう。武器は姉のセーバルから新調してもらい、既に猛威を振るっているらしい。武器がギターケースと聞いた時は……セーバルらしい突飛さで笑ったものだ。どこぞの灰の武器商人が大爆笑しそうだな。

近々ジエパードの仕事ぶりを見に前線にお忍びで行ってみるか。俺の組手を耐えきったから早々に遅れをとる事はないだろうが…やはり心配はする。信じてないという訳ではない。

さて、それぞれの近況も語ったところでそろそろ問題に取り掛からねばなるまい。

「貴様は何しに来た。愚者？」

「聞いてませんよ…伴侶の方がいるなんて…」